

日本動物看護学会誌

Animal Nursing (アニマル・ナーシング)

Vol.15-16 (第15・16巻 合併号)

10-11

ついに、超低分子の領域へ。

I型、さらにIV型食物アレルギーのために。



食物アレルギーによる
皮膚疾患・消化器疾患の
犬のために

新発売

[規格] 1kg/3kg (ドライタイプ)

アミノペプチド フォーミュラ

ANALLERGENIC

アミノ酸とオリゴペプチドのみで調製された低アレルゲン食
犬用 アミノペプチド フォーミュラは、食物アレルギーによる皮膚疾患および
消化器疾患の犬に給与することを目的として、特別に調製された食事療法食です。
この食事の窒素源はアミノ酸およびオリゴペプチドで構成されており、
炭水化物源としてコーンスターチを使用しています。

ROYAL CANIN
VETERINARY DIET

食事療法食に関するご質問は **0120-761-101**
テレフォンサポート

受付時間 10:00~12:00、13:00~17:00 (土日、夜日を除く)

www.royalcanin.co.jp/

ロイヤルカナン ジャパン Inc.

〈販売者〉
共立製薬
東京都千代田区2-15-10

日本動物看護学会誌

Animal Nursing (アニマル・ナーシング)

Vol.15-16 (第15・16巻 合併号)

2010-11

2010-11



日本動物看護学会



革新的！
「甲状腺機能亢進症」を、
食事でコントロール。



科学的に証明された栄養が、
「甲状腺機能亢進症」を無理なくコントロールします。

- ☑ 毎日の食事を替えるだけ。
- ☑ 低ヨウ素食で、しかも猫が喜ぶおいしさ。
- ☑ 3週間*で「甲状腺」の健康に役立つことが、科学的に証明された栄養。
- ☑ 食事療法なので副作用が起こりにくい。

ヒルズのプリスクリプション・ダイエット
〈猫用〉 y/d ドライ・缶詰

★ Yu S, Wedekind KJ, Burris PA, et al. J Vet Intern Med 2011;25:683-684



輸入者：
日本ヒルズ・コルゲート株式会社
〒135-0016 東京都江東区東陽3-7-13



独占的販売元：
DSファーマアニマルヘルス株式会社
〒553-0001 大阪市福島区海老江1-5-51

獣医師専用の食事療法情報テレホン
☎ 0120-211-317
<http://www.hills.co.jp>



投稿論文

目次には筆頭発表者だけを表記しています。

原著論文	動物看護師31名の労働状況とメンタルヘルス	木村祐哉 (北海道大学大学院医学研究科)	1
原著論文	動物看護師のイメージと認知度に関する調査	比嘉恵子 (関西動物看護教育研究会)	7
原著論文	イヌ・ネコ飼い主の日常的飼育ケアの安定と継続に関する質的研究 ー飼育の準備段階における飼い主の体験からー	小倉啓子 (ヤマザキ学園大学)	17
短 報	がんサロンを開催した1例	三輪教子 (カニエ動物クリニック)	25
本学会則	29		
本会役員	33		
投稿規程	35		

原著

動物看護師31名の労働状況とメンタルヘルス

木村祐哉¹⁾、山内かおり²⁾、川畑秀伸¹⁾

Relationship between the Mental Health and Working Conditions of 31 Veterinary Technicians

Yuya Kimura, Kaori Yamanouchi, Hidenobu Kawabata

1) 北海道大学大学院医学研究科

〒060-0638 北海道札幌市北区北15条西7丁目

2) OFFICE AniPro

〒565-0853 大阪府吹田市春日2丁目1番4号403

要約

動物看護師の労働状況とメンタルヘルスの現状について把握するための予備的研究として、現役で勤務している動物看護師を対象に質問調査を実施した。調査はウェブを介して行い、32名の回答を得た。有効回答は31名であり、そのうち15名(46.8%)は心と身体の健康調査表(STPH)の抑うつ尺度得点が高く、うつ病の可能性があるとして判断された。同得点による抑うつ傾向は未婚者よりも既婚者で強かった。過去に思い描いていた動物看護師像と現在の自己認識像が乖離している者でも抑うつ傾向は強く、そうした乖離を防ぐために職業教育や求職活動のあり方を再考する必要性が示唆された。また、自由記述からは「ワーク・ライフ・バランスの未達成」や「人間関係での苦勞」、「労働条件に関する不満」などが問題として指摘された。
キーワード：うつ病、職業ストレス、動物看護師

Abstract

A pilot study involving a web-based questionnaire was performed to investigate the relationship between the mental health and working conditions of veterinary technicians. The study collected data from 32 active veterinary technicians. Of the 31 valid participants, 15 (46.8%) were suspected of having depression because they had a high score for the depression subscale of the Screening Test of Psychosomatic Health (STPH). The STPH scores indicated that married participants had a significantly greater tendency to be depressed than those who were single. Furthermore, participants with an image gap between ideal and actual job

conditions showed a strong depression tendency, which indicates the need to review the style of vocational education and job search methods used during the course of training. The responses to the qualitative questions indicated that the following factors created problems for the veterinary technicians: inability to achieve a work-life balance, sense of interpersonal burden, and unsatisfactory work environment.

Keywords: depression, occupational stress, veterinary technician

序文

一般に医療従事者は、常日頃から過度なストレスに曝されていることが知られている¹²⁾。こうしたストレス過剰状態は、様々な身体的および精神的疾患をもたらすのみならず、専門技術の正確な行使を妨げ、医療過誤の原因となることも懸念されている¹⁷⁾。獣医療によってもたらされる健康阻害因子として、動物咬傷や針刺しなどの物理的要因、種々の病原体やアレルギーへの曝露、麻酔ガスの吸引に代表される化学生物学的要因、過重労働や人間関係の困難のような心理社会的要因などが挙げられるが¹⁾³⁾¹¹⁾¹⁴⁾¹⁶⁾、こうした問題への対策は十分でなく、獣医療従事者にとって大きなストレスになっていると考えられる³⁾⁵⁾。

うつ病や抑うつ状態は、各種のストレスによって心身に生じる代表的な反応のひとつである。その診断は本来、医療面接に基づいて行うものであるが、簡易的なスクリーニングツールが開発されており、これは抑うつの程度を定量的に評価するための有効な手段にもなっている¹⁵⁾。そうした様々な手段を用いることによ

り、たとえばイギリスでは、3割弱の獣医師で抑うつ状態、不安症状が認められ²⁾、獣医師全体の自殺率が一般集団の3.6-3.7倍にまで達することが確認されている⁷⁾。こうした状況はオーストラリアでも同様にみられ⁴⁾、またフィンランドにおける調査では、およそ4割の獣医師がいわゆる“燃え尽き症候群”に陥っていることが示されている¹⁴⁾。

このように獣医師の抱える問題が次第に明らかにされてきている一方で、筆者らの知る限り、同じ獣医療従事者である動物看護師に注目した調査は国際的にもみられず、動物看護職における産業衛生上の問題は見過ごされている可能性がある。そこで本研究では、動物看護師の労働状況とメンタルヘルスの現状を把握することを目的として、産業衛生領域で開発された心と身体健康調査表 (STPH)¹⁰⁾を採用した質問紙調査を実施し、動物看護師におけるうつ病の存在を確認するとともに、職業関連ストレスとの関連を検討した。

方法

調査は現在も就労している動物看護師を対象として、2008年10月27日から2009年3月10日に実施した。アンケートフォームをウェブ上に設置し、動物看護師向けのソーシャル・ネットワーキング・サービス (AniPro, (有)プラクリティ、東京) を通じて回答を呼びかけた。ウェブへのアクセスが困難である者に対しては、希望に応じてアンケートフォームの印刷物を配布し、紙面による回答も認めた。回答は匿名で行われ、個人情報の特典が不可能な状態で情報を収集した。

アンケートフォームの質問内容として、性別、婚姻状態、年齢、勤続年数、1日の勤務時間、最終学歴などの属性に加え、動物看護師である第2筆者 (K.Y.) の経験を踏まえ、問題になっている可能性があると考えられるストレス19項目を列挙し、それぞれに対する暴露の有無を尋ねた。さらにSTPHから、木村ら¹⁰⁾に従い、不眠と抑うつに関わる下位尺度を構成する計15項目を採用し、抑うつ尺度得点が8点以上の者を、うつ病である可能性が高いと考えられる「抑うつ群」、7点以下の者は「健常群」と判定した。回答者の属性やストレスへの曝露の有無によるSTPHの各得点の違いは、R version 2.8.1 (The R Project for Statistical Computing, <http://www.r-project.org/>) を用いて統計学的に解析した。連続変数の値を

とるものはSpearman順位相関係数の有意性検定、離散変数の値をとるものにはWilcoxon順位和検定を実施し、統計学的有意水準はいずれも $P<0.05$ とした。また、設問の最後には、日常的に体験しているその他のストレスについて自由な記述を求めた。

結果

現役の動物看護師32名の回答が得られた。そのうち欠損値のあった1名を除外すると、女性が30名、男性は1名だった。31名のうち未婚者が24名、既婚者は7名だった (表1)。回答者の年齢は21-36 (平均±標準偏差: 27.9 ± 4.4) 歳で、勤続年数は1-15 (6.1 ± 3.9) 年、1日の勤務時間は5-14 (10.7 ± 2.4) 時間だった。最終学歴が中学校もしくは高等学校卒業の者はおらず、専門学校、短期大学などに設置された動物看護養成課程を卒業していたのが27名、その他の進学を経ていたのは4名だった。STPHの総合得点は4-21 (12.4 ± 4.9) 点だった。不眠尺度得点は1-10 (4.1 ± 2.2) 点、抑うつ尺度得点は2-18 (8.3 ± 4.1) 点であり、31名中15名が「抑うつ群」に該当した (46.8%)。

統計学的解析では、STPHの各得点と年齢、勤続年数、勤務時間との間には相関が認められなかった。婚姻状態でSTPH得点に差が認められ、既婚者は未婚者よりも抑うつ尺度得点 ($P<0.05$) および総合得点 ($P<0.05$) が有意に高かった (表1)。設問で尋ねたストレスの中では、「現在の自分は、思い描いていた動物看護師像そのものだ」という項目に対し、否定的だった者のほうが抑うつ尺度得点 ($P<0.01$) と総合得点 ($P<0.01$) は高く、また産休を取ることができないという者のほうが不眠尺度得点が低かった ($P<0.01$)。その他の項目については、統計学的に有意な差は認められなかった (表2)。

有効と認められた31名中25名の回答から、その他の日常的ストレスに関する自由記述が得られた (表3)。記述内容としてはまず、長時間におよぶ負荷の大きな労働によって肉体的・時間的な余裕がなくなり、私生活に支障を及ぼしているという、「ワーク・ライフ・バランスの未達成」に関するものが挙げられた。特に既婚者では、家事と育児の両立が困難であり、またそれによって周囲に迷惑をかけていることへの苦悩が記されていた。次に新人指導や獣医師との意思疎通

表1 属性とSTPH得点

		人数	不眠		抑うつ		総合得点	
婚姻状態	未婚	24	4.0 (1.25)	W=69.0	7.0 (3.00)	W=36.5*	11.0 (3.25)	W=37.0*
	既婚	7	4.0 (1.00)		12.0 (1.75)		17.0 (3.00)	
最終学歴	動物看護師養成課程	27	4.0 (1.00)	W=69.5	7.0 (2.75)	W=45.0	12.0 (2.75)	W=49.5
	その他進学	4	3.5 (0.75)		9.5 (5.50)		12.5 (5.75)	

中央値 (四分位偏差) . *: P<0.05, **: P<0.01

表2 検討したストレスと回答ごとのSTPH得点

		人数	不眠		抑うつ		総合得点	
業務の中に得意なものがある	はい	29	4.0 (1.00)	W=4.5	7.0 (3.00)	W=25.5	12.0 (3.00)	W=17.0
	いいえ	2	1.5 (0.50)		7.5 (3.50)		9.0 (3.00)	
勤務時間内に食事する余裕がある	はい	25	4.0 (1.00)	W=94.5	7.0 (3.00)	W=65.0	12.0 (3.00)	W=75.5
	いいえ	6	4.5 (0.50)		8.5 (4.00)		13.5 (4.50)	
休暇は足りている	はい	10	5.0 (0.50)	W=61.5	6.0 (4.00)	W=132.0	13.5 (5.00)	W=107.5
	いいえ	21	4.0 (1.00)		8.0 (3.00)		12.0 (3.00)	
現在の給与は自分の能力に対して十分な額だと思う	はい	8	4.0 (1.25)	W=83.0	8.5 (3.50)	W=81.5	13.0 (5.00)	W=83.5
	いいえ	23	4.0 (1.25)		7.0 (2.75)		12.0 (3.00)	
セミナーや学会に参加する機会がある	はい	24	4.0 (1.50)	W=87.5	7.0 (3.50)	W=91.0	12.0 (4.00)	W=89.5
	いいえ	7	4.0 (0.75)		8.0 (2.00)		14.0 (2.50)	
診療について、同僚からいろいろ教えてもらえる	はい	20	4.0 (1.25)	W=151.0	8.0 (3.00)	W=116.5	11.0 (3.50)	W=137.5
	いいえ	11	5.0 (1.25)		7.0 (3.25)		15.0 (3.00)	
適度な責任を課されている	はい	26	4.0 (1.00)	W=34.5	7.0 (3.00)	W=57.0	12.0 (3.50)	W=48.5
	いいえ	5	2.0 (1.50)		10.0 (4.00)		12.0 (5.50)	
就職前に受けた教育とのギャップは気にならない	はい	11	4.0 (0.75)	W=103.0	7.0 (3.50)	W=134.5	10.0 (3.25)	W=129.0
	いいえ	20	4.0 (1.50)		8.5 (3.00)		12.0 (3.25)	
オーナーとのコミュニケーションを苦痛とは思わない	はい	28	4.0 (1.00)	W=35.0	7.0 (3.50)	W=58.0	11.5 (4.00)	W=54.5
	いいえ	3	3.0 (1.75)		11.0 (1.00)		15.0 (1.00)	
治療費や経費の話をするのは、特に苦ではない	はい	25	4.0 (1.00)	W=93.5	7.0 (4.00)	W=103.5	11.0 (3.50)	W=107.5
	いいえ	6	5.0 (2.50)		10.5 (1.50)		15.0 (4.00)	
本来の業務以外の雑用はそれほど多くない	はい	5	3.0 (0.50)	W=87.0	4.0 (2.50)	W=91.5	6.0 (2.50)	W=95.5
	いいえ	26	4.0 (1.00)		8.5 (3.00)		12.5 (3.00)	
院内の人間関係は良好だ	はい	21	4.0 (1.00)	W=100.5	7.0 (3.00)	W=116.5	12.0 (2.50)	W=116.5
	いいえ	10	3.5 (1.50)		8.5 (3.00)		13.0 (5.00)	
人手は足りている	はい	17	4.0 (1.50)	W=117.5	10.0 (4.00)	W=108.5	13.0 (4.50)	W=105.0
	いいえ	14	4.0 (1.00)		7.0 (2.00)		11.0 (2.50)	
現在の自分は、思い描いていた動物看護師像そのものだ	はい	6	4.0 (0.50)	W=78.0	3.5 (1.50)	W=131.0**	8.0 (1.50)	W=128.0**
	いいえ	25	4.0 (1.50)		10.0 (2.50)		14.0 (3.00)	
この仕事を続けていく自信がある	はい	15	4.0 (1.00)	W=76.5	7.0 (3.50)	W=155.5	12.0 (4.00)	W=131.5
	いいえ	16	3.5 (1.25)		9.5 (2.75)		13.0 (3.00)	
産休が取れる	はい	10	5.0 (1.50)	W=42.5**	8.5 (4.50)	W=102.0	16.0 (5.00)	W=77.0
	いいえ	21	3.0 (2.00)		7.0 (2.50)		12.0 (2.50)	
レントゲンで被爆しないように対策がとられている	はい	29	4.0 (1.00)	W=30.5	8.0 (3.00)	W=17.5	12.0 (3.00)	W=15.5
	いいえ	2	4.0 (1.00)		5.5 (1.50)		9.5 (0.50)	
日常の勤務の中でセクハラと感じることはない	はい	20	4.0 (1.00)	W=99.0	7.0 (4.00)	W=142.5	11.0 (4.50)	W=134.0
	いいえ	11	4.0 (1.00)		9.0 (2.25)		13.0 (2.50)	
職場の環境 (温度、換気、光量など) は良い	はい	23	4.0 (1.25)	W=52.0	7.0 (3.75)	W=105.5	12.0 (3.75)	W=88.5
	いいえ	8	2.5 (1.00)		10.0 (2.00)		11.5 (2.50)	

中央値 (四分位偏差) . *: P<0.05, **: P<0.01

表3 自由記述欄への回答(抜粋)

<p>ワーク・ライフ・バランスの未達成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勤務時間が長く帰宅時間が遅い ・仕事だけに集中しすぎるあまりそれ以外のプライベートなことが苦痛 ・毎日仕事に追い立てられ、普段の生活(例えば部屋の掃除など)に意欲的になれず、その結果、プライベートが充実せず、その蓄積が慢性的なストレスになっているように感じる ・VTになったことで自分が飼っているペットにかかる時間がとても少なくなってしまった ・仕事は好きだが家庭や育児との両立が難しく、家庭にしわ寄せがいき、家族に申し訳ないと思うことが多々ある ・子供を保育所に預けて仕事をするに罪悪感を感じる時があります <p>人間関係での苦勞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・院長との方針の相違。雇われ、VTという立場から獣医師に対して意見しづらい ・院内スタッフの関係は良好ですが経営者側とはトラブルが絶えず、ミーティングが紛糾するたびに多大なストレスが溜まります ・ひどく横暴な態度の人(飼主や上司など)を見たり、その人と接しなくてはいけない時 ・挨拶からおしえなきやならない新人指導は精神的な苦痛だ ・泥酔した院長からかなりのセクハラを受ける。シラフでは何もないのでどう対処したらいいのか分からない ・子供の都合で遅刻やお休みをいただくことが稀にあり、他のスタッフの方たちにご迷惑をかけているのではないかと良く思われていないのではないかとと思うと辛いです ・産休後、パート勤務になり週休3日で勤務していますが、それが原因でフルタイム社員の後輩と人間関係が悪くなった ・VTが自分一人なので仲間が欲しいと思います。仕事の相談が誰にもできないので辛いです <p>労働条件に関する不満</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仕事に見合った給与や評価が得られないこと。スキルアップに対する援助が一切ないこと ・激務にも関わらず、給料や福利厚生など待遇が異常に悪い <p>将来に対する不安</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年齢的に自分の人生にも焦りを感じ、最近はずべて仕事がネックになっているような気がしています ・夜勤のため、ずっと続けていける仕事ではないと思ひ、将来のことや転職を考えだすと不安になります <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教わったことがすぐに習得できない自分に対してストレスを感じます ・半年ほど前から気持ちのコントロールができなくなったように思う。自分は鬱なのではないかと思うこともある
--

いずれも原文ママ。

に対する苦痛などの「人間関係での苦勞」、給与や福利厚生の不備など「労働条件に関する不満」があり、さらに動物看護職として長く勤務し続けることが難しいなどの「将来に対する不安」が述べられた。また、仕事以外のことに関する興味が沸いてこない、気持ちのコントロールができないといった、抑うつ傾向を示唆するような記述も認められた。

考察

本調査では、調査対象となった動物看護師31名のうち15名(46.8%)が「抑うつ群」に該当し、うつ病である可能性が高いと考えられた。日本の一般成人におけるうつ病の生涯有病率は4-15%であることから¹⁵⁾、7割がうつ病あるいは抑うつ状態と報告されている看護師¹²⁾と比べて少ないものの、動物看護職におけるうつ病は多いと推測される。この結果は、3割程度が抑うつや不安症状を有していたという、諸外国における獣医師の調査に近いものである²⁾⁴⁾。うつ病の診断は本来、「精神障害の診断と統計の手引き」(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, DSM)などの指針に基づき、医療面接で下されるものである

ため¹⁵⁾、必ずしもこの15名全員がうつ病であるとは限らない。しかし、STPHのうつ病診断に対する特異度は0.88と優れており¹⁰⁾、偽陽性が少ないため、この調査票で陽性であった場合に、うつ病と診断される可能性は比較的高いと考えられる。

統計学的解析では、未婚者よりも既婚者のほうが抑うつ傾向が強かった。人の看護職における調査では、既婚者よりも未婚者のほうが抑うつ傾向の強い状態であることが示されているが⁹⁾¹³⁾、幼い子どもがいるような場合には、やはり家庭と仕事との両立が困難になることでストレスが増すという報告もある⁸⁾。動物看護師にとって、こうした家庭と仕事の両立が懸念材料となっていないか確認することが必要であろう。一方、本調査では、産休を取ることが可能な場合のほうが不眠傾向は強いという結果も得られており、この点についてはさらなる検討が求められる。

理想の動物看護師像と現実との乖離が抑うつ尺度得点の上昇と関連していた。理想と現実との違いが抑うつを招いていると考えられ、そこからは労働条件の改善や卒後教育の充実が肝要であることが示唆される。また、今回の対象者の平均年齢は27.9歳であり、新人

の動物看護師は多くないと推測されるが、31名中20名(64.5%)が就職前に受けた教育とのギャップを気にしていることから(表2)、動物看護師養成課程での職業教育と求職活動のあり方を見直し、就職時のミスマッチを防ぐことによる改善も期待できるであろう。看護教育の例を挙げると、学生から看護師への移行期に経験する多くの困難をやわらげ、仕事に対する適応を促進させるためのプログラムなども検討されている⁶⁾。

本調査結果より、動物看護職においても産業衛生上の配慮が必要であることが示唆された。ただし、ここには調査対象の偏り、調査項目の妥当性、因果関係の未検証といった限界がある。まず、これはソーシャル・ネットワーキング・サービスの利用により、ウェブを介して行われた小規模な調査であり、比較的ITリテラシーに長けた者やその知人、あるいは情報収集に積極的な者に対象が偏っていると考えられる。次に、ここで検討した各要因は、探索的研究によって網羅的に導き出されたものではなく、またあくまで調査対象者本人の主観によるものであるため、この結果は労働環境の不備を正確に示すものではない。さらに、本調査はひとつの時点における結果に過ぎないため、各要因の影響でメンタルヘルスが悪化したのか、あるいはメンタルヘルスが悪いために各要因が表れたのかという、因果関係の検証はできていない。今後は設問内容をさらに検討した上で、規模の大きな経時的調査を行うことにより、適切な状況把握に努め、動物看護職における労働状況の改善に取り組むことが重要であろう。

なお、本調査を実施するにあたり、開示すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) Baker WS, Gray GC: A review of published reports regarding zoonotic pathogen infection in veterinarians, *JAVMA*, 234, 1271-1278, American Veterinary Medical Association (2009)
- 2) Batram DJ, Yadegarfar G, Baldwin DS: A cross-sectional study of mental health and well-being and their associations in the UK veterinary profession, *Soc Psychiatry Psychiatr Epidemiol*, 44, 1075-1085, Springer International (2009)
- 3) D'Souza E, Barraclough R, Fishwick D, Curran A: Management of occupational health risks in small-animal veterinary practices, *Occup Med (Lond)*, 59, 316-322, Oxford University Press (2009)
- 4) Fritschi L, Morrison D, Shirangi A, Day L: Psychological well-being of Australian veterinarians, *Aust Vet J*, 87, 76-81, Australian Veterinary Association (2009)
- 5) Gardner DH, Hini D: Work-related stress in the veterinary profession in New Zealand, *N Z Vet J*, 54, 119-120, New Zealand Veterinary Association (2006)
- 6) 後藤桂子、松谷美和子、平林優子、桃井雅子、村上好恵、佐居由美ほか: 新人看護師のリアリティショックを和らげるための看護基礎教育プログラム、*聖路加看護学会誌*, 11, 45-52, 聖路加看護学会 (2007)
- 7) Haliwell REW, Hoskin BD: Reducing the suicide rate among veterinary surgeons: how the profession can help, *Vet Rec*, 157, 397-398, British Veterinary Medicine (2005)
- 8) 本間千代子、中川禮子: 看護職における家庭と仕事の両立 葛藤—看護職と働く一般女性との比較—、*日本赤十字武蔵野短期大学紀要*, 15, 31-37, 日本赤十字看護大学 (2002)
- 9) 一瀬久美子、堀江令子、牟田典子、松山育枝、佐藤逸子、浅田まつえほか: 看護師が抱える職場ストレスとその対応、*保健学研究*, 20, 67-74, 長崎大学 (2007)
- 10) 木村拓磨、松田史帆、芦原睦: 心と身体の健康調査表 (Screening Test of Psychosomatic Health: STPH-21) の信頼性と妥当性の検討、*日本心療内科学会誌*, 12, 69-75, 日本心療内科学会 (2008)
- 11) Lucas M, Day L, Shirangi A, Fritschi L: Significant injuries in Australian veterinarians and use of safety precautions, *Occup Med (Lond)*, 59, 327-333, Oxford University Press (2009)
- 12) 森本寛訓: 医療福祉分野における対人援助サービス従事者の精神的健康の状態と、その維持方策について—職業性ストレス研究の枠組みから—、*川崎医療福祉学会誌*, 16, 31-40, 川崎医療福祉学会 (2006)
- 13) 中尾久子: 女性看護職の抑うつに対する婚姻状態の影響、*山口医学*, 54, 165-173, 山口大学医学会 (2005)
- 14) Reijula K, Räsänen K, Hämäläinen M, Juntunen K, Lindbohm ML, Taskinen H, et al: Work environment and occupational health of Finnish veterinarians, *Am J Ind Med*, 44, 46-57, Wiley-Blackwell (2003)
- 15) 坂本真士、大野裕: 抑うつの臨床心理学、7-28, 東京大学出版会 (2005)
- 16) Shirangi A, Fritschi L, Holman CDJ: Associations of Unscavenged Anesthetic Gases and Long Working Hours With Preterm Delivery in Female Veterinarians, *Obstet Gynecol*, 113, 1008-1017, Lippincott Williams & Wilkins (2009)
- 17) West CP, Tan AD, Habermann TM, Sloan JA, Shanafelt TD: Association of Resident Fatigue and Distress With Perceived Medical Errors, *JAMA*, 302, 1294-1300, American Medical Association (2009)

原著

動物看護師のイメージと認知度に関する調査

比嘉恵子、竹花正剛、阿部令子、高橋佳代子、井田竜馬、稲次絵美子、川畑翔、崎山法子、山内かおり

Investigation on image and the recognition of Animal Nurse

Keiko Higa, Seigo Takehana, Reiko Abe, Kayoko Takahashi, Ryoma Ida, Emiko Inatsugu, Tsubasa Kawabata,

Noriko Sakiyama, Kaori Yamanouchi

関西動物看護教育研究会（K4）

〒610-0313 京都府京田辺市三山木田中44番地14

近年ペットの健康に対する飼い主の意識が高まり、その中で動物看護師が果たす役割も重要度を増してきていると感じられるが、実際に一般の方が動物看護師をどのように位置づけているのかは定かではない。そこで本研究では動物看護師の認知度を図る目的で一般の方を対象に調査を行った。結果として「動物看護師」をあまり認識していないことが明らかになった。これらの結果を受けて、今後は動物看護師の職域および動物看護教育の確立が急務であると思われる。

はじめに

近年ペットの健康に対する飼い主の意識が高くなってきている。それに伴い小動物獣医療に求める業務と技術の多様化・細分化が見られる。このような獣医療の中でチームの一員である動物看護師の役割は重要性を増していると感じられる。

人の看護師のイメージ研究は数多くなされており、看護学生対象の研究結果によると、看護師は重要でやりがいはあるが、重労働で窮屈な職業であり学年が進み志望動機が明確になるにつれイメージは好転し、相対的にポジティブなイメージとなるが、看護師の性格イメージは卒業学年に近づくにつれマイナスよになると報告されている（曾根原・小林，1995¹⁾；吾郷，1996²⁾；吾郷・高橋，1998³⁾）。

川畑ら（2007）⁴⁾ は人の看護師・動物看護師に対するイメージは、優しい・知的・必要など全体的に評価が高いが、獣医師と同じく苦しい・辛いなど仕事内容に対する評価が低いという結果を示した。動物看護師の印象についての質問に対して、優しい・テキパキしている・明るいというポジティブな印象が多い反面、

怖い・冷たい・使われているなどのマイナスの印象も含まれていた。

しかし飼い主が小動物獣医療の多様化・細分化に伴い、動物看護師に対してどのようなイメージを持っているかについての研究報告は数少ないのが現状である。特に動物看護師の役割や期待度について飼い主側の意識を知ることは重要な課題である。

目的

本研究では動物看護師の認知の有無とイメージ、動物看護師と獣医師への要望の違い、ペットの愛着度と、動物看護師の認知度や動物病院への来院回数とが、関連しているか否かに焦点を当てて検討することを目的とする。

小嶋ら（2007）⁵⁾ は看護学生の看護および看護師に対する研究を動物看護師に適用し、動物看護学生の学年が進むにつれて変化するイメージの差異について質問紙を用いて検討した。

曾根原・小林（1995）¹⁾ は、学生に対してSD法を用いて学年ごとの差異について言及した。

川畑ら（2007）⁴⁾ の研究では、動物系の専門学生に関してSD法を用いて看護師と動物看護師などに対するイメージについて調査した。

池田ら（2007）⁶⁾ は犬の年齢別による認知症の研究の中で、ペットとの関係質問紙と犬の健康管理についての質問紙から因子分析を行った。

原（2007）⁷⁾ は動物系専門学校の動物看護師士コース学生に対して、t検定を用いて愛着度からみるペットとその飼い主の健康管理について調査した。

以上の研究より、動物看護師のイメージは学年差や

看護師専攻学生と非看護師専攻学生（ドクトレーナー・トリマー）において相違が見られた。看護師と動物看護師の評価はともに良く、女性の仕事というイメージであった。愛着度の強さは、ペットと飼い主との関係に依存していた。愛着度が高い飼い主ほど犬への健康管理に気を遣っており、病気の予防や早期発見につながっていると分かった。

一般の人に対する動物看護師へのSD法を用いたイメージ研究は皆無であるが、動物看護師の認知度に関する基礎情報を得ることを目的に、動物看護師という言葉に対するイメージについて、動物看護師を知っている人と知らない人のイメージの相違について分析し、一般の人が抱くイメージを知ることは、動物看護師の社会的認知度を知る上で重要である。

獣医師と動物看護師の役割に関して、医師と看護師に対する一般の人が考える職務へのイメージや要望の違いが、動物看護師と獣医師にも当てはまると考えられるが、実際の業務分掌のような役割を、一般の人が求めているのかどうかについての報告はなく、動物看護師の理想と現実、期待度に関しては日本動物看護学会や日本動物看護学会、関西地区例会などでいくつかは報告されている。

今回は、動物看護師の認知度の違いによって、獣医師と動物看護師に要望する職務にどのような相違があるかを検討する。

これまで大阪コミュニケーションアート専門学校では、2007年度から2009年度にかけて、ペットへの愛着度と飼い主の関係をさまざまな角度から卒業研究といった枠組みで検討を加えてきた。その研究は相当数にのぼるが、飼い主の示すペットへの愛着度が、動物看護師の認知度や動物病院への来院回数に、どのような関与をしているかについてはこれまで検討されていない。

池田ら（2007）⁵⁾、原（2007）⁶⁾の研究より飼い主の動物に対する健康意識の高さが、愛着度と高い相関を示していることから、ペットに対する愛着度は、動物病院への来院回数や動物看護師の認知度に大きく関与していることが予想される。

仮説

仮説1. 動物看護師を知っている群と知らない群では、動物看護師に対するイメージに違いがあるで

あろう。

仮説2. 動物看護師と獣医師に求める事柄には、違いがあるであろう。

仮説3. 来院回数が多いほど、愛着度が高くなるであろう。

仮説4. 動物看護師の認知度が高いほど、愛着度が高いであろう。

方法

1. 実施期間および場所

実施期間は平成20年7月～10月、調査地域は大阪および京都を中心とした、近畿二府四県の動物病院および街頭にて調査を行った。

2. 対象者

10代～70代のペット飼育者および非飼育者を含む280名であった。

3. 質問紙（参考資料1）

(1) 動物看護師に関する基礎アンケート

性別、職業、ペット飼育の有無と種類、来院回数、動物看護師の認知度（知っている・知らない）についての質問項目から成っている。

来院回数に関しては次の通りであった。

①行ったことがない ②ほとんど行ったことがない
③年に1～2度 ④半年に2～3度 ⑤1ヶ月に1～2度
⑥ほぼ毎週行っている ⑦ほぼ毎日行っている

(2) ペットへの愛着度尺度

ペットへの愛着度尺度は「ペットは友達以上」「ペットを飼うことはお金の無駄遣いだ」「ペットは家族の一員である」「ペットを愛している」「ペットはペットにし過ぎない」「ペットといるとホッとする」「ペットがいないと寂しい」「ペットのことをよく理解している」など全8項目で「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法で測定した（独自に作成）。分析はポジティブな意味を持つ属性ほど得点が高くなるように逆転させた。

(3) 動物看護師のイメージに関する質問紙（SD法）

動物看護師という言葉を知っている群と知らない群では、動物看護師に対するイメージに違いがあるであろう。

使用した形容詞対は以下の通りである。

「親しみやすい－親しみにくい」「明るい－暗い」「責

<動物看護師に関するイメージ調査> No.1

動物看護師による社会貢献を充実させるためのアンケート調査です。
この調査結果を今後の活動に活かしたいと思います。
なお、本調査で得たデータは、本調査以外では使用しません。ご協力をお願いします。

参考資料 1

I. お答え下さる方に関する質問
①性別 [男 女] ②年齢 [] 歳
③職業 [学生 会社員 自営業 主婦 その他()]
④今までに動物を飼ったことがありますか? [飼ったことがない 飼ったことがある]
“飼ったことがある”とお答えくださった方にお聞きします。動物種を教えてください。()内は頭数。
[犬()頭 猫()頭 ウサギ()羽 ハムスター()匹
フェレット()頭 鳥()羽 その他()()匹]

⑤動物病院にはどの程度行かれますか?
[1. 行ったことがない 2. ほとんど行ったことがない 3. 年に1~2度
4. 半年に2~3度 5. 1ヶ月に1~2度 6. ほぼ毎週行っている 7. ほぼ毎日行っている]

⑥どういったことで病院を利用されましたか? (複数回答可)
[ワクチン ノミダニ予防 避妊・去勢手術 フード購入 トリミング 薬剤購入
治療 健康診断 その他()]

II. 「動物看護師」という職業を っていますか? [知っている 知らない]

III. 動物看護師のイメージについて、当てはまる数字に ○ をつけてください。
“ II ”で “知らない” と答えられた方も、「動物看護師」という言葉を聞いて抱くイメージについてお答えください。

	1	2	3	④	5	6	7	小さい)
	非常に大きい	かなり大きい	やや大きい	どちらでもない	やや小さい	かなり小さい	非常に小さい	
親しみやすい	1	2	3	4	5	6	7	親しみにくい
明るい	1	2	3	4	5	6	7	暗い
責任のない	1	2	3	4	5	6	7	責任のある
不安な	1	2	3	4	5	6	7	安心な
男性的な	1	2	3	4	5	6	7	女性的な
冷たい	1	2	3	4	5	6	7	暖かい
かたい	1	2	3	4	5	6	7	柔らかい
きれいな	1	2	3	4	5	6	7	汚い
思いやりがない	1	2	3	4	5	6	7	思いやりがある
単純な	1	2	3	4	5	6	7	複雑な
安全な	1	2	3	4	5	6	7	危険な
信頼できない	1	2	3	4	5	6	7	信頼できる
友好的な	1	2	3	4	5	6	7	友好的でない

★ 裏面にもあります! ご協力ください ★

No.2

魅力的ではない	1	2	3	4	5	6	7	魅力的な
不親切な	1	2	3	4	5	6	7	親切的な
優しい	1	2	3	4	5	6	7	厳しい
丁寧	1	2	3	4	5	6	7	丁寧ではない
面倒見の悪い	1	2	3	4	5	6	7	面倒見の良い
肯定的	1	2	3	4	5	6	7	否定的
知的ではない	1	2	3	4	5	6	7	知的
話しやすい	1	2	3	4	5	6	7	話にくい
身近ではない	1	2	3	4	5	6	7	身近な
対応の早い	1	2	3	4	5	6	7	対応の遅い
不満足な	1	2	3	4	5	6	7	満足な
柔軟な	1	2	3	4	5	6	7	頑固な

IV. 動物に対する愛着度に関する質問(あてはまるところに ○ をつけてください)
動物を飼ったことのない方は、飼ったと仮定してお答えください。

	当てはまる	少し 当てはまる	どちらでも ない	あまり 当てはまらない	当てはまらない
ペットは友達以上である					
ペットを飼うことはお金の無駄遣いだ					
ペットは家族の一員である					
ペットを愛している					
ペットはペットにしか過ぎない					
ペットといるとホッとする					
ペットがいないと寂しい					
ペットのことをよく理解している					

V. 獣医師および動物看護師に望む事柄を、下記の語群から選び、上位5位までの番号を記入してください。

獣医師 1位 _____番 2位 _____番 3位 _____番 4位 _____番 5位 _____番
動物看護師 1位 _____番 2位 _____番 3位 _____番 4位 _____番 5位 _____番

1. 診察	2. 治療	3. 注射	4. 薬の処方	5. 調剤	6. 薬の説明	7. 技術	8. 検査
9. 世間話	10. 病気に対する説明	11. 退院後のケアに関する説明	12. 入院中の看護	13. 入院中の様子報告	14. 日常のケアに関するアドバイス	15. 飼い主に対する勉強会	16. 飼育に関するアドバイス
17. 食餌・栄養に関するアドバイス	18. 予防に関するアドバイス	19. 介護	20. 介護に関するアドバイス	21. 手術助手	22. 治療の補助	23. リハビリ	24. リハビリに関するアドバイス
25. 動物との死別に関するケア	26. しつけ教室	27. 応急処置	28. 会計	29. 受付	30. 消毒	31. 掃除	32. 事務処理
33. 訪問	34. その他()						

ご協力 ありがとうございます。 関西動物看護教育研究会一同

参考資料 1

任のある-責任のない」「安心な-不安な」「女性的な-男性的な」「暖かい-冷たい」「柔らかい-かたい」「きれいな-汚い」「思いやりがある-思いやりがない」「複雑な-単純な」「安全な-危険な」「信頼できる-信頼できない」「友好的な-友好的でない」「魅力的な-魅力的でない」「親切的な-不親切的な」「優しい-厳しい」「丁寧-丁寧でない」「面倒見の良い-面倒見の悪い」「肯定的な-否定的な」「知的-知的でない」「話しやすい-話にくい」「身近な-身近でない」「対応の早い-対応の遅い」「満足な-不満足な」「柔軟な-頑固な」以上25対の肯定的かつ否定的な形容詞対をランダムに並べ替えて作成した。

(4) 動物看護師・獣医師に望む事柄に関するアンケート

獣医師および動物看護師に望む事柄を34のリスト(1. 診察 2. 治療 3. 注射 4. 薬の処方 5. 調剤 6. 薬の説明 7. 技術 8. 検査 9. 世間話 10. 病気に対する説明 11. 退院後のケアに関する説明 12. 入院中の看護 13. 入院中の様子報告 14. 日常のケアに関するアドバイス 15. 飼い主に対

する勉強会 16. 飼育に関するアドバイス 17. 食餌・栄養に関するアドバイス 18. 予防に関するアドバイス 19. 介護 20. 介護に関するアドバイス 21. 手術助手 22. 治療の補助 23. リハビリ 24. リハビリに関するアドバイス 25. 動物との死別に関するケア 26. しつけ教室 27. 応急処置 28. 会計 29. 受付 30. 消毒 31. 掃除 32. 事務処理 33. 訪問 34. その他)より上位5位までを選択し、1位を5点、2位を4点、3位を3点、4位を2点、5位を1点と得点化した。

結果と考察

対象者の性別、年齢、職業の内訳は次の通りであった。

性別：男性55人 女性224人 不明1人
年齢：10代15人 20代59人 30代59人 40代51人
50代52人 60代33人 70代5人 不明6人
職業：学生28人 会社員75人 自営業25人
主婦123人 その他25人 不明4人
ペット飼育の有無：飼育者256人 (94.46%)

非飼育者15人 (5.54%)

(1) 動物看護師へのイメージ

動物看護師を知っている群 (166名)、知らない群 (114名) それぞれの動物看護師に対するイメージに関して、主因子法による因子分析を行った (バリマック

ス回転) (表1-1、表1-2)。因子負荷量0.40 (絶対値) 以上の項目を抽出し、各因子の解釈を行った。共通負荷量の低い項目を削除して、再度因子分析を行い、知っている群、知らない群、それぞれ3因子と4因子が抽出された。動物看護師を知っている群は、第1因子を「親和・親近性」、第2因子を「共感・信頼性」、

表1-1. 動物看護師イメージ (知っている)

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
親しみやすい-親みにくい	0.83	0.10	-0.18	0.74
明るい-暗い	0.67	0.10	-0.16	0.49
暖かい-冷たい	0.67	0.34	-0.10	0.57
柔らかい-かたい	0.52	0.24	-0.15	0.35
身近である-身近でない	0.43	0.29	-0.16	0.30
柔軟な-頑固な	0.52	0.30	-0.38	0.51
責任のある-責任のない	0.00	0.63	0.03	0.40
安心な-不安な	0.24	0.68	-0.02	0.53
思いやりがある-思いやりがない	0.23	0.50	-0.19	0.33
複雑な-単純な	0.06	0.48	-0.01	0.23
信頼できる-信頼できない	0.29	0.46	-0.02	0.29
魅力的な-魅力的でない	0.28	0.54	-0.12	0.38
面倒見の良い-面倒見の悪い	0.18	0.62	-0.18	0.45
知的-知的でない	0.18	0.62	-0.18	0.46
優しい-厳しい	0.15	-0.02	-0.83	0.70
丁寧-丁寧でない	0.16	0.16	-0.83	0.73
安全な-危険な	0.15	0.01	-0.15	0.05
安全な-危険な	0.33	0.13	-0.35	0.24
肯定的-否定的	0.31	0.30	-0.27	0.26
話しやすい-話しにくい	0.47	0.11	-0.43	0.42
対応の早い-対応の遅い	0.32	0.28	-0.32	0.28
二乗和	3.24	3.23	2.24	8.71
寄与率	15.42%	15.40%	10.68%	
累積寄与率	15.42%	30.81%	41.49%	

表1-2. 動物看護師イメージ (知らない)

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
責任のある-責任のない	0.66	-0.04	-0.12	-0.17	0.48
安心な-不安な	0.69	-0.13	-0.12	-0.33	0.62
柔らかい-かたい	0.46	0.02	-0.29	0.01	0.30
複雑な-単純な	0.55	0.02	-0.23	0.06	0.36
信頼できる-信頼できない	0.79	0.11	-0.18	0.09	0.68
魅力的な-魅力的でない	0.57	0.14	-0.23	0.04	0.40
親切的な-不親切的な	0.69	0.26	-0.09	0.32	0.66
面倒見の良い-面倒見の悪い	0.60	0.06	-0.08	-0.02	0.37
知的-知的でない	0.79	-0.02	-0.03	-0.26	0.70
優しい-厳しい	-0.04	0.81	-0.11	-0.12	0.69
丁寧-丁寧でない	0.01	0.83	-0.15	-0.21	0.75
肯定的-否定的	0.26	0.51	-0.25	-0.14	0.41
話しやすい-話しにくい	0.17	0.55	-0.33	-0.38	0.58
親しみやすい-親みにくい	0.17	0.13	-0.77	-0.06	0.65
明るい-暗い	0.26	0.11	-0.85	-0.02	0.80
対応の早い-対応の遅い	0.04	0.34	-0.49	-0.16	0.38
柔軟な-頑固な	0.21	0.33	-0.59	-0.21	0.55
きれいな-汚い	0.11	0.31	-0.09	-0.56	0.43
安全な-危険な	0.02	0.11	-0.03	-0.68	0.47
友好的な-友好的でない	0.02	0.31	-0.17	-0.48	0.35
女性的な-男性的な	0.22	0.05	0.04	-0.05	0.05
二乗和	4.15	2.50	2.42	1.61	10.69
寄与率	19.77%	11.91%	11.55%	7.66%	
累積寄与率	19.77%	31.68%	43.22%	50.88%	

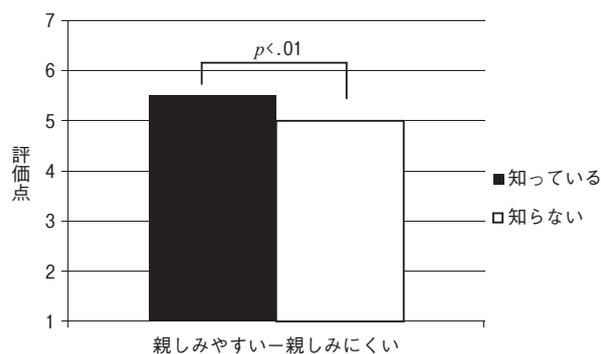


図1-1：動物看護師のイメージ

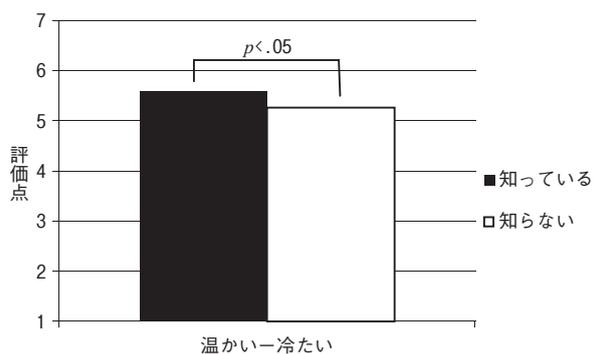


図1-2：動物看護師のイメージ

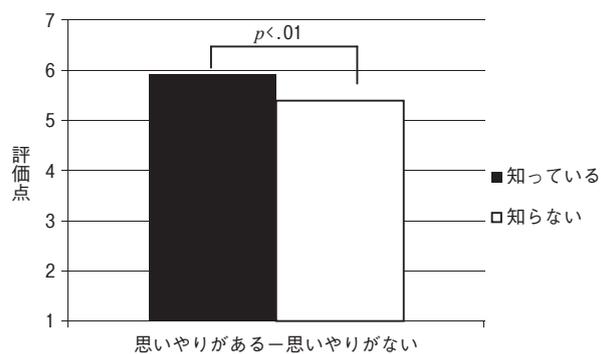


図1-3：動物看護師のイメージ

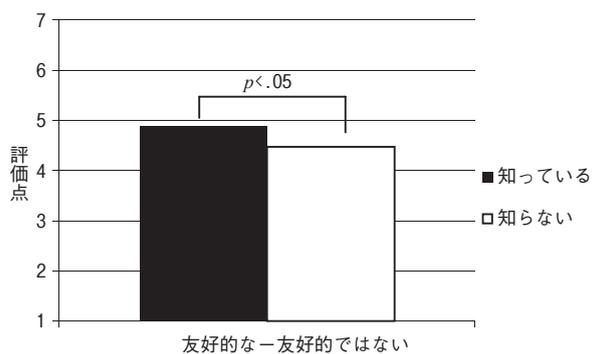


図1-4：動物看護師のイメージ

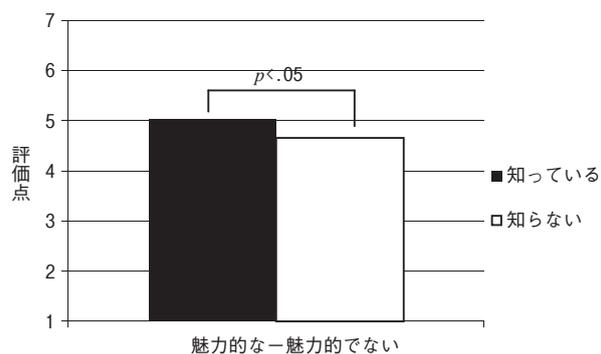


図1-5：動物看護師のイメージ

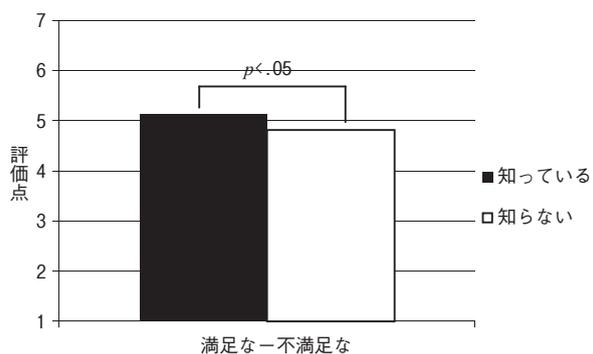


図1-6：動物看護師のイメージ

第3因子を「気遣いのなさ」と名づけた。一方、動物看護師を知らない群は、第1因子を「親和・信頼性」、第2因子を「やさしさ」、第3因子を「融通性のなさ」、第4因子を「非友好・汚さ」と名づけた。動物看護師を知っている群と知らない群の因子分析の結果を比較したところ、知っている群の第2因子である「共感・信頼性」と知らない群の第1因子である「親和・信頼性」で類似した項目が見られた。しかし、その他のカテゴリーでは類似は見られず、知っている群は3カテゴリーに、知らない群では4カテゴリーに分かれたことから、知っている群と知らない群とでは、動物看護師に対するイメージに違いがあることが示される結果となった。すなわち、仮説1の「動物看護師を知っ

ている群と知らない群では、動物看護師に対するイメージに違いがあるであろう」は支持されたといえる。

図1-1から図1-6は、動物看護師を知っている人と知らない人の、各項目（全25項目）における比較結果の一部を示したものである。図1-1から図1-6に共通してポジティブな項目の方が、統計的に有意に高い評価点を示した。有意に高いイメージ項目は、以下に示す通りである。項目ごとに対応のないt検定（自由度278）を行った。「親しみやすい」（ $t=3.17$ ）「明るい」（ $t=3.24$ ）「思いやりがある」（ $t=3.07$ ）「親切的な」（ $t=3.33$ ）「身近な」（ $t=3.23$ ）は1%水準で、「暖かい」（ $t=2.04$ ）「友好的な」（ $t=2.06$ ）「魅力的な」（ $t=2.37$ ）「面倒見の良い」（ $t=2.50$ ）「満足

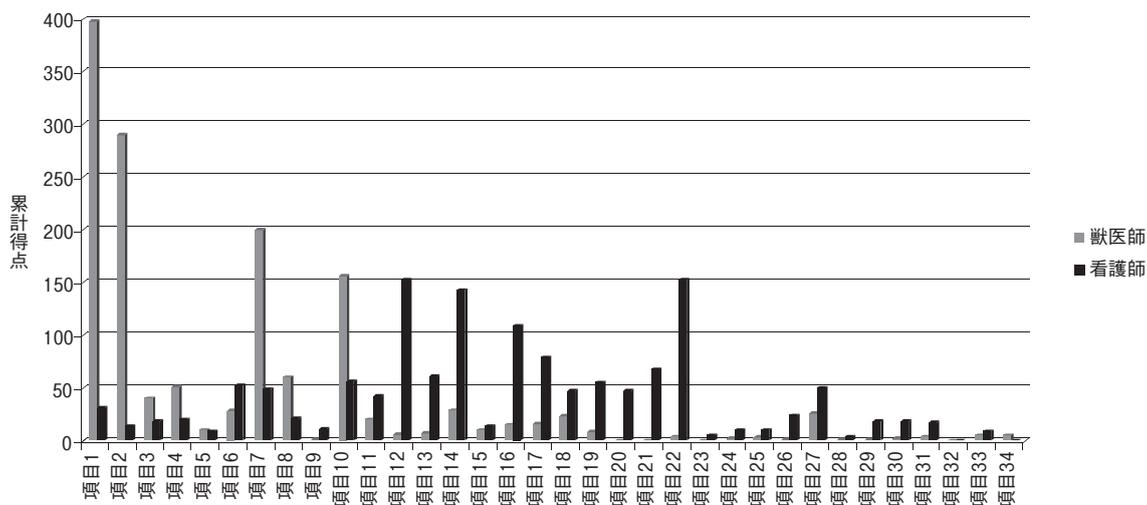


図 2-1：獣医師・動物看護師に望む事柄（看護師を知っている）

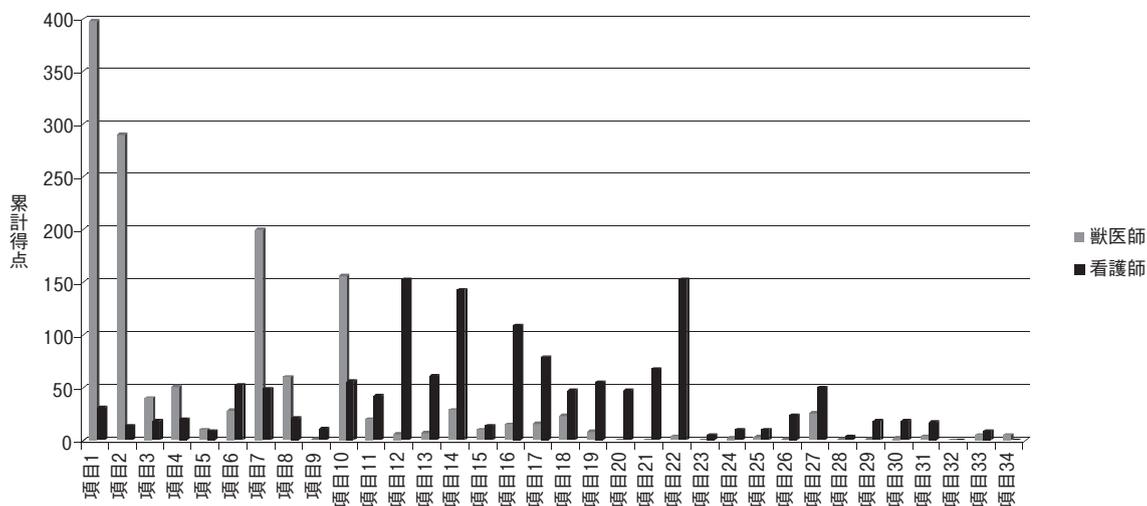


図 2-2：獣医師・動物看護師に望む事柄（看護師を知らない）

な」($t=2.15$)は5%水準で有意差が認められた。また、「複雑な」($t=1.68$)「丁寧な」($t=1.98$)「対応の早い」($t=1.94$)では有意傾向を示し、動物看護師を知っている群の方が知らない群より、全体的にポジティブなイメージを持っていることが分かった。

因子分析では、動物看護師を知っている群と知らない群では、因子構造に違いが見られたが、形容詞対の比較から相対的に動物看護師を知っている群は、ポジティブなイメージが強いという結果は、動物看護師と接する機会が多いからだとも考えられる。以上から動物看護師を知らず、ネガティブなイメージを持っている人が、動物看護師と接する機会を多く持つことで、動物看護師のイメージが良い方向に変わりうる可能性も示唆された。

(2) 動物看護師と獣医師に望む事柄

動物看護師と獣医師に求める業務内容を比較するため、動物看護師と獣医師に望む事柄の1位を5点、2位を4点、3位を3点、4位を2点、5位を1点と得点化し、項目ごとに得点を累計した。動物看護師を知っている、知らないに関わらず、動物看護師と獣医師に求める事柄には明確な違いが見られた(図2-1、図2-2)。

獣医師に対しては医療行為、病気の説明、薬の処方にポイントが偏るが、動物看護師への要望は多岐に渡っている。主として医療行為の補助、病気の動物の看護はもちろんだが、健康各期(良好～病・老・死を含む)の動物たちへの日常のケア、食餌・栄養、飼育や介護のアドバイスが求められている。

また、動物看護師を「知っている群」と「知らない

群」とで比較したところ、動物看護師に望む事柄には大きな差は無かった。従って、仮説2「動物看護師と獣医師に求める事柄には違いがあるだろう」は、動物看護師を知っている群、知らない群、両群において支持された。

動物看護師の認知の有無に関わらず、獣医師と動物看護師の業務を区別していることは、人の医療における医師と看護師のイメージを重ねているのではないかと推測される。また、求める事柄に大きな差が無かったことから、動物看護師の存在を知っている、業務に対する理解の程度には差がないと考えられる。

(3) 来院回数と愛着度に関する分析

質問紙に用いた愛着尺度項目に関して、主因子法による因子分析を行った(280名;バリマックス回転)(表2)。因子負荷量0.40(絶対値)以上の項目を抽出し、各因子の解釈を行った。その結果、項目2および項目8以外の6つの項目(「ペットは友達以上である」「ペットは家族の一員である」「ペットを愛している」「ペットはペットにしか過ぎない」「ペットといるとホッとする」「ペットがいないと寂しい」)に高い因子負荷量が見られた。これを「ペットとの絆」と名づけた。以下、愛着得点は上記6項目の合計得点(最高得点30点)とする。「愛着得点」と来院回数の相関分析を行ったところ、正の相関がみられた($r=0.407$, $p<.01$)。

また、来院回数低頻度群(①行ったことがない ②ほとんど行ったことがない 来院回数L群)、来院回数中頻度群(③年に1~2度 ④半年に2~3度 ⑤1ヶ月に1~2度 来院回数M群)、来院回数高頻度群(⑥ほぼ毎週行っている ⑦ほぼ毎日行っている 来院回数H群)に分け「愛着得点」を比較した(図

3)。1要因の分散分析の結果、群間に1%水準で有意差が見られた($f(2,274)=34.26$ $p<.01$)。LSD法による多重比較の結果、来院回数L群よりもM群、H群ともに5%水準で有意に愛着得点が高いことが示された。すなわち、図3より来院回数が多いほど、愛着度が高いという結果を得た。

以上より、仮説3の「来院回数が多いほど、愛着度が高いであろう」は支持された。

図4は、動物看護師の認知度と来院回数の関係を示したものである。2要因の分散分析(看護師を知っている・知らない×来院回数L群・M群・H群)を行った。看護師の認知度、交互作用は有意差が見られず、来院回数に1%水準の有意差が見られた($f(2,271)=34.00$)。そこでLSD法による多重比較を行った。動物看護師を知っている群は、来院回数L群よりもM群、H群の方が5%水準で有意に愛着得点が高かった。動物看護師を知らない群は、L群よりもM群の方が5%水準で有意に愛着得点が高かったが、L群とH群では有意差はなかった。来院回数に関して言えば、動物看護師を知っているか否かにかかわらず、相対的に愛着度の高い人は、来院回数が増えるといった結果を示唆した。これは愛着度が高い飼い主ほど、日頃から

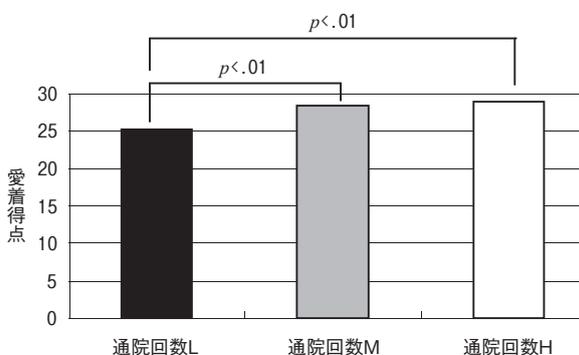


図3：来院回数と愛着度

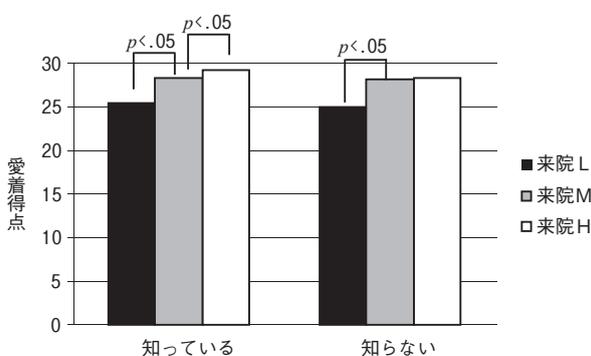


図4：動物看護師の認知度と来院回数

表2. ペットとの愛着度

項目	ペットとの絆
項目6「ペットといるとホッとする」	0.74
項目7「ペットがいないと寂しい」	0.73
項目3「ペットは家族の一員である」	0.70
項目1「ペットは友達以上である」	0.66
項目4「ペットを愛している」	0.63
項目5「ペットはペットにしか過ぎない」	0.53
項目8「ペットのことはよく理解している」	0.39
項目2「ペットを飼うことはお金の無駄遣いだ」	0.34
二乗和	2.95
寄与率	36.88%
累積寄与率	36.88%

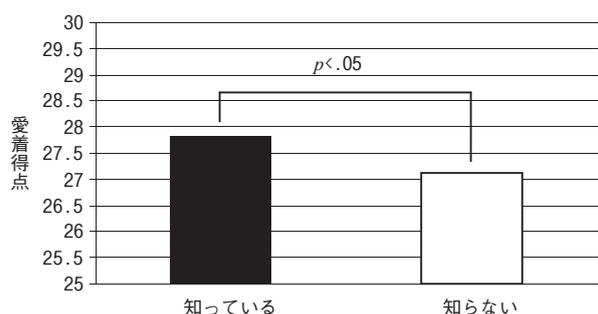


図5：愛着度と動物看護師の認知度

ペットと密に接しており、些細な変化にも気付きやすいからだと考えられる。またペットを病気にしたくないという思いから、予防にも高い意識を持ち、それに伴って来院回数が増えると考えられる。

さらに愛着得点を、動物看護師を知っているか知らないかで比較した(図5)。*t*検定の結果、動物看護師を知っている群の方が知らない群よりも、5%水準で有意に愛着得点が高かった($t(278) = 1.88$, $p < .05$)。以上より、仮説4の「動物看護師の認知度が高いほど、愛着度が高いであろう」は支持された。愛着度と来院回数には相関があり、来院回数と動物看護師の認知度に関連があったことから、愛着度が高い人ほど来院回数が多くなり、来院することが動物看護師の認知につながると示唆される。

総合考察

本調査で獣医師に求める事柄が「治療」に関するものに集中しているのに対し、動物看護師に求める事柄は多岐に渡っていることが明らかになった。このことは明確な動物看護師像が無いために、要望が漠然としていることがひとつの原因であると思われる。明確な動物看護師像が無いのは、動物看護師の職域が確立しておらず、各病院での動物看護師の業務内容が違うため、担う責任の重さや飼い主との関わりの深さに、大きな差が生じるためだと考えられる(川畑ら, 2009⁸⁾; 山内ら, 2009⁹⁾)。

以上のことから筆者らは、動物看護師が専門職として確立されることが今後の課題であると結論付け、そのことが社会的認知度を向上させるためにも重要で欠くことのできない要素であると考えられる。

認知度を上げるためには動物看護師単独の働き掛けだけでなく、獣医師が動物看護師を認め飼い主および一般の方々への働き掛けも必要と考えるが、獣医師に

認められ信頼を得るためには、看護計画の立案および実践をはじめとした、専門職としての動物看護職側の努力も必要不可欠である。

同時に本調査では動物看護師への要望は多岐に渡り、特に各種アドバイスを求めていることが明らかとなった。このことは、動物看護師の認知の有無に関わらず「信頼できる」「面倒見の良い」「知的な」といった、ポジティブなイメージを持っていることが要因の1つだと考えられる。

また飼い主は一般的なアドバイスではなく、飼い主やペットの個々の状況をも含めた、オーダーメイドともいえるアドバイスを求めていることが予想される。しかし現在多くの動物看護職養成機関のカリキュラムでは、獣医療に関する知識や看護技術の習得が中心となっており、これは本調査においての飼い主の要望を満たすには十分ではない。

筆者らは現在の動物看護教育ではあまり重要視されていない、コンサルテーション知識・技法を含めた、対人援助者としての教育カリキュラムの整備を行う必要があると考える。しかしながら、動物看護学生や現役動物看護師に対して指導を行う動物看護師や獣医師には、その分野を専門とする人材は少ない。今後対人援助カリキュラムの整備と並行して、それらの分野を指導出来る人材を育成することが急務であると考えに至った。

おわりに

今後の展望として今回の結果を基礎データとし、現在行っている動物看護学生と獣医学生を対象としたアンケートの分析や、人医療の看護師との比較研究などを行う予定である。

また動物看護学についての多角的な研究をもとに、独自の教育プログラムの開発を行い動物看護師養成機関はもちろんのこと、現職者への教育にも活用していきたい。

引用文献

- 1) 曾根原純子、小林千世：看護学生の看護婦イメージに関する研究—理想と—現実の学年別比較、信州大学医療技術短大紀要、21、77-90 (1995)
- 2) 吾郷ゆかり：看護学生の看護婦イメージ—動機と性格特性との関連における分析—、鳥根県立看護短期大学紀要、1、17-23 (1996)

- 3) 吾郷ゆかり、高橋恵美子：看護学生の看護婦イメージの変化—3年間の追跡調査の分析より—、島根県立看護短期大学紀要、3、61-68 (1998)
- 4) 川畑翔、仲田光伸宏、中島康佑：動物看護師に対する職業イメージ調査、大阪コミュニケーションアート専門学校卒業研究、103-108 (2007)
- 5) 小嶋未来、大田千絵、北島愛夢、佐藤雅俊、藤田朋美、渡部美樹ほか：動物看護学生が抱く動物看護職のイメージ—学年差についての検討—、Animal Nursing、12、54-63 (2007)
- 6) 池田悠貴乃、江口由華、岡本麻美、川畑茜：犬の年齢別による認知症の研究—ペットの関係質問紙と健康管理から見た分析—、大阪コミュニケーションアート専門学校卒業研究、14-23 (2007)
- 7) 原しおみ：愛着度からみるペットとその飼い主の健康管理について—動物看護師コースを対象にして—、大阪コミュニケーションアート専門学校研究、157-162 (2007)
- 8) 川畑翔、阿部令子、井田竜馬、稲次絵美子、崎山法子、高橋佳代子ほか：動物看護師に対するイメージ調査、日本動物看護学会 関西地区第2回例会論文集、23-28 (2009)
- 9) 山内かおり、阿部令子、井田竜馬、稲次絵美子、川端翔、崎山法子ほか：動物看護師の認知度とイメージに関する調査、ヒトと動物の関係学会 第15回学術大会抄録集、4 (2009)

原著

イヌ・ネコ飼い主の日常的飼育ケアの安定と継続に関する質的研究 －飼育の準備段階における飼い主の体験から－

小倉啓子

Qualitative Study on the Stability and Continuation of Day-to-Day Pet Care by Dog or Cat Owners
－ Based on the experiences of pet owners in the preparation stage for pet care －

Keiko Ogura

ヤマザキ学園大学

〒192-0364 東京都八王子市南大沢4-9-2

要約

本研究では、イヌ・ネコ飼い主へのインタビューで得たデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、イヌ・ネコ飼い主が安定的な日常的飼育ケアを行っていくプロセスを検討した。分析により5つのカテゴリーと13の概念を得て、飼い主は自分や家族、イヌ・ネコ（ペット）がストレスなく共に暮らせるような環境を提供するという方針のもとで継続的なケアを行っていることを明らかにした。イヌ・ネコを飼う準備段階では、その方針にそって入手できるサポートを利用し、自分の家に適したイヌ・ネコを選び、家族のケアの協力を確認して、飼育に関する不安に対処していた。一方、飼い主はイヌ・ネコに関する知識や経験が不足し、一方的な愛情や期待をイヌ・ネコに掛けたり、物事を深く検討しないで決定したりする傾向もあった。飼育ケアの安定と継続を確実にするには、準備段階から専門的サポートを提供することが必要である。

キーワード：飼い主、日常的飼育ケア、飼育の準備段階、飼育ケアの基本方針、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

Abstract

This study has analyzed data collected from w w interviews on dog and cat owners in the Modified Grounded Theory Approach to examine their process of providing stable day-to-day care to the animals. The analysis has identified 5 categories and 13 concepts, with pet owners providing continuous

care under the policy of offering an environment whereby they, their family and their pets can cohabit happily without any strains. In the preparatory stage of adopting a pet, the samples have utilized available support in line with this basic policy, simulated pet care to select a suitable breed of dog / cat for their household, and confirmed cooperation from family members to address any anxiety or concern about pet care. On the other hand, they have demonstrated the tendency to have lack of knowledge or experience about dogs / cats, impose one-sided love and expectations on the pets, and settle on pet matters without giving in-depth considerations. In order to ensure stability and continuation of pet care, it is necessary to provide specialized support from the preparation stage.

Keywords : Pet owner, day-to-day pet care, preparation stage for pet care, basic policy for pet care, Modified Grounded Theory Approach

I 序文

イヌ・ネコの飼い主は一生にわたる飼育ケアを担い続け、その過程は20年近くになることもある。問題がない時でも、病気や事故、問題行動などで特別な対応が必要になった時でも、それぞれの状況に応じた関わりをしていく必要がある。飼い主にとってどのように適切な飼育ケアをしていくのかは、飼育の安定と継続にも関わる重要な課題である。動物医療・看護の専門家にとっても飼い主がどのような日常的ケアをしなが

ら飼育ケアを続けているのか、どんな不安や疑問があるのかに関心を持ち、理解することが重要である。なぜなら、動物医療・看護をより効果的に行うには、飼い主の考えや気持ちを理解し、円滑な意思疎通を図って協力関係、信頼関係を形成する必要があると考えられるからである。

従来から動物看護師には獣医師と飼い主との意思疎通をサポートするという役割が求められてきた^{1)、2)、3)}。動物看護師がこの役割を果たすためには、動物の身体面の知識やスキルだけでなく、飼い主の考えや気持ち、行動の意味を飼い主の視点にたって理解し、対応することが重要である^{3)、4)、5)}。

飼い主の考えや気持ちを理解しようとする場合、飼い主はどのような日常的な飼育ケアをしているのか、なぜそうするのかなどを飼い主に語ってもらうことは有効な方法であると考えられる。動物医療・看護の現場で出会う飼い主の気持ちや行動には、それまでの日常生活やイヌ・ネコと関係性、飼い主のケアに関する考えや経験が反映されていると考えられるし、専門職とは異なる考えや気持ちを知ることによって飼い主理解を深めることにもなるからである。また、イヌ・ネコの長命化、飼い主との親密な関係、高度医療の普及などの変化がみられるなかで、飼い主も専門職も新たな課題に出会い、飼育ケアの修正や再構築に取り組むこともあると思われる。生涯にわたる飼育ケアをどのように安定的・継続的なものにしていくのか、専門家はどのような援助をするのかを検討することは飼い主と専門職、イヌ・ネコの愛護にとって重要な課題と考えられる。

そこで、本研究では飼い主へのインタビューをもとに、飼い主はどのようなケア方針でどのような飼育ケアを行って安定的で継続的なケアにしようとしているのか、飼育の準備段階ではどのように準備を進めたのかをとらえ、準備段階にある飼い主を理解し、専門職の支援のあり方を検討することとする。

II 方法

1. データ：調査期間は2008年7月～2010年8月である。協力者は都区内と近郊の市部在住で、現在イヌ・ネコ1～2頭を数年以上室内飼育しているイヌの飼い主15名とネコの飼い主10名の合計25名である。年齢は30歳～65歳、性別は女性21名と男性4名、住居はマン

ションが19名と一軒家が6名だった。また、協力者は大学授業のモデル犬の飼い主、飼育の学習会メンバーなど飼育ケアへの関心が高く、安定してケアを続けていると考えられる人々だった。イヌはほとんどが小型か中型で、ペットショップかブリーダーから購入していた。ネコは雑種で譲渡か野良猫だった。ともに生後2、3か月で飼いはじめており、25名中10名にイヌ・ネコとの死別体験があった。

インタビュー前に研究目的とプライバシー保護の説明を行い、筆者の専門は心理学で、動物の専門家ではないことを伝えた。1、2回の半構造化インタビューを計60分～120分を行い、許可を得て録音し逐語録を作成した。質問項目は飼った動機や経緯、日常的ケア、病気・問題行動・事故とその対処、近隣や医療関係者との関わり、老いや死への対応などである。写真やケア用品の持参を頼んだところ、ほとんどの飼い主が持参したので、それらを見ながらインタビューした。4名がイヌを同伴した。

2. 分析方法：質的研究法のひとつである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)⁶⁾を用いた。M-GTAは医療・看護・介護・福祉など対人サービス領域で用いられている。分析法の大枠は研究テーマと飼い主の視点からデータの意味を解釈し、定義と独自の説明概念を生成し、概念間の関係からカテゴリー化して全体を一つにまとめる。この分析過程で分析ワークシートの作成、理論的サンプリング、継続的比較分析、理論的飽和化のチェックを行う。これらの作業は分析が恣意的に進むことを防止する機能もある⁷⁾。

III 結果と考察

M-GTAでは分析と考察が同時進行するため結果と考察とをまとめて報告する(図)。カテゴリーは【 】, 定義は< >, 概念は‘ ’で示した。「 」は飼い主の発言である。

1. 【飼育ケアの基本方針】：‘互いに楽しく、無理なく暮らせるケア’

飼い主は「この子の人生に責任があるけど、そうガチガチしたものじゃなくて、自然体で、その寿命を全うするまで見てあげよう、ここで私が見ているか

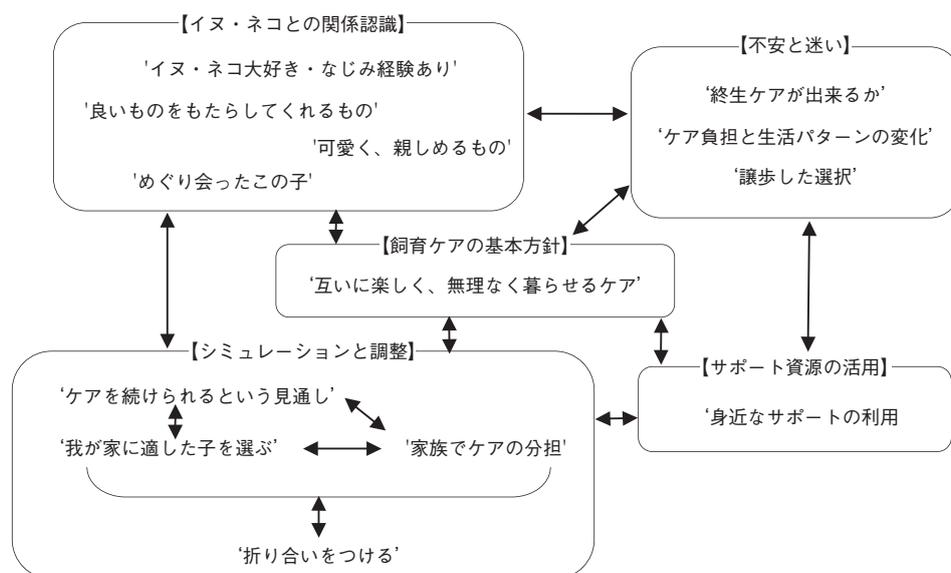


図 イヌ・ネコ飼い主の飼育準備段階における体験 【 】 カテゴリー ‘ ’ 概念 → 影響関係

ら安心していなさいって感じ」,「人間の食べ物は『だめ』、『これはいけない』、『待て』は大事な躰と思う。でも、それ以上のことは求めない」、「散歩は子どもの役目になっている」、「休みの日は息子や主人が世話をする」などとケアの責任を果たしつつ、人間にもイヌ・ネコにも無理がないように関わろうとする様子がみられた。このような関わりは他にもさまざまな場面でみられ、「具合が悪ければ、獣医さんにみてもらう」と医療を求め、飼い主仲間や本、インターネットから情報を集めるなどのサポートを利用していた。イヌ・ネコにも自分にもストレスにならないように注意しており、「この子は甲高い声が苦手、幼稚園の前は抱いて通るようにしている」、「他のイヌがいると緊張するから、毛は家でカットする」、「この子が自由に飛び上がったたり、下りたり出来るように落ちて困るものは置かない。叱ることにならないようにしている」、「去勢しないと、この子にも自分達にもストレスになると思って手術した」などの例があった。特に老いや病気の状況では医療に期待する一方、「苦しくはないか。自分では訴えられないのだから、私がわかってやらないと」と気遣ったり、「治療費はどの位かかるか」と気にしたりしていた。また、飼い主は楽しく過ごすことにも熱心で、「この子はやんちゃだから面白い」と個性を愛し、「十分に散歩した時は、笑うような表情をする」とイヌが満足する様子に喜んでいた。「いろいろな味を楽しみたいだろうから、味の違うフードを買う」、「残り物整理に一週間に一度はおじや。経済的

だし、この子の大好物、肥満予防にもなる」など楽しみながらケアの工夫をしていた。

このようなことから、問題がある時もない時も、飼い主はイヌ・ネコとの関係や飼育ケアを自然で無理がなく楽しいものにしようという方針をとっており、その方針を状況に応じて柔軟に展開していくことで安定的、継続的に日常的ケアをしているのではないかと考えられた。そこで、〈飼い主が、自分や家族とイヌ・ネコとが互いに楽しく、負担を掛けずに暮らせるようなケアをしていく〉ことを「互いに楽しく、無理なく暮らせるケア」と概念化し、【飼育ケアの基本方針】と位置付けた。

しかし、飼い主だけで「互いに楽しく、無理なく暮らせるケア」とはどのようなケアなのかを状況に応じて判断し、実行することは難しいのではないかと考えられる。日常的ケアの場合でも、そのケアの適否を判断するにはある程度の知識や経験が必要であり、問題が生じた場合にはより高度で広範囲の知識や経験が求められる。このようなことから、飼育ケアのどの段階においても専門的援助は必要であり、特に経験が浅い飼い主、なかでも飼育準備をしている人達への援助は重要であると考えられる。

そこで、次に、飼育準備段階にいる飼い主がどのような認識や気持ち、過去の経験をもとに飼育の準備を行ったのか、そして、準備段階の行動がその後の「互いに楽しく、無理なく暮らせるケア」の安定的・継続的な展開にどのような影響を与える可能性があるのか

を検討する。

2. 飼育準備の過程における飼主の体験

飼い主がイヌ・ネコを飼うまでの準備過程に関わるカテゴリーと概念を抽出した。

(1) 【イヌ・ネコとの関係認識】：イヌ・ネコを飼った動機や経緯をみると、飼い主は自分とイヌ・ネコとの関係をさまざまな意味でとらえており、飼い主なりの【イヌ・ネコとの関係認識】をもっていることがわかった。

飼い主には〈自分はイヌ・ネコが好きで、親しんだ経験がある〉‘イヌ・ネコ大好き、なじみ経験あり’という認識がみられた。実家や祖父母、友達の家でイヌ・ネコと親しんだことがあり、初めて飼う場合でも、街やテレビ番組で見て「可愛い、ずっと飼いたいと思っていた」など以前から自分はイヌ・ネコ好きで親しく触れ合った経験があり、ある程度の飼育の知識もあると考えていた。また、イヌ・ネコの姿や仕草から〈自分にはイヌ・ネコは可愛く親しめる存在である〉‘可愛く、親しめるもの’をとらえていた。イヌ・ネコへの期待もみられ、〈イヌ・ネコは自分や家族に何か良いものをもたらしてくれる存在である〉‘良いものをもたらしてくれるもの’と考える場合もあった。そのなかには、「子どもが大きくなって家族がバラバラ、イヌを飼えば会話を取り戻せるかと思った」、「子どもに友だちがいなくて、イヌを飼うことで友だち作りの切掛けになればと思った」、「愚痴を言える相手が欲しかった」など人間関係やコミュニケーションを円滑にしてくれるだろうという期待がみられた。「庭つきの家を持てたのだから大型犬を飼いたい」と理想の生活を実現することへの期待もあった。

飼い主は〈このイヌ・ネコは自分とは不思議なめぐり合わせで出会った子である〉‘めぐり会ったこの子’という【イヌ・ネコとの関係認識】を持つ場合もあった。このような認識を持つ飼い主は、そのイヌ・ネコと出会った時の状況を詳細に語り、「活発で、私の方にトコトコと寄って来た」、「この種では珍しいクロ、ぴったりの子だと思った」、「ポケットに入るほど小さくて一目惚れした」、「ケージの隅からじっとこっちを見ていた」、「(野良ネコ) 歩いている姿が可愛くて、追いかけた」など、イヌ・ネコの愛らしさや幼さ、姿形や仕草に惹かれたり、憐れみや親しみを感じたりし

た様子がみられた。「惹きつけられた」、「離れられなくなった」など急速に愛情が深まる様子もみられた。「他の子は可愛くて元気だから買い手は他にもいるけれど、この子は弱そうだから残ってしまう」、「3匹のうち未熟児の子を貰った。『やめたら』と言われたけれど、何とか育てられると思った」と周囲が反対してもあえて選んだり、「鼻も目もグチャグチャ、このままでは死んでしまう」と捨て猫を飼ったりするなど憐れみの気持ちが強まる様子もみられた。

このように、飼い主は‘イヌ・ネコ大好き・なじみ経験あり’、‘可愛く、親しめるもの’などととらえて、飼いたい気持ちを強めたり、自分とは特別な縁がある子、助けを求めている子と意味付けて急速に愛情や憐れみの気持ちを深めたりしていく様子がみられた。

このような飼い主の【イヌ・ネコとの関係認識】をみると、イヌ・ネコを可愛い、親しいなどとポジティブにとらえたり、特別な縁のある存在と考えたりしていたと同時に、自分の気持ちや期待を実現してくれる相手としてイヌ・ネコをもの的・道具的にみる面もあったのではないかと考えられる。また、準備段階では、実際のイヌ・ネコはどのような存在なのか、イヌ・ネコと飼い主とがどんな関係を作って飼育ケアをしていくことが適切なのかを認識するのは難しいことだったかもしれない。「めぐり会ったこの子」と意味付けることで、飼い主はそのイヌ・ネコへの愛情や責任感、ケアの意欲を強めていく可能性もあろう。しかし、衝動的な感情や思い込みで飼い始めたり、特に健康に問題があるイヌ・ネコをあえて選んだりすると、ケアの負担が予想以上に掛ることになるかもしれない。不幸にして【イヌ・ネコとの関係認識】がお荷物のようなことになることも考えられる。

専門的援助者としては、飼い主が思い込みや過剰な期待、誤解をもとに飼育準備を進めることのないように、飼い主がどのようなイヌ・ネコのイメージや期待をもっているかに関心を持ち、それを尊重すると同時に現実的な判断が出来るようサポートする必要があると考えられる。問題を生じる可能性のあるイヌ・ネコを飼おうとする時にも飼い主の気持ちを理解しつつ、予想される問題は何かを伝え、現実的で長期的な視点で考えられるように手助けをする必要がある。このような関わりによって、飼い主は‘互いに楽しく、無理なく暮らせるケア’を安定的に継続していくことの

重要性や難しさを知り、自分の飼育ケアの能力を検討するようになるのではないと思われる。

(2) 【不安と迷い】：飼いたい気持ちがある一方で、飼育への不安や迷いをもった飼い主もいた。「子どもの頃に、父と多摩川にイヌを捨ててに行った。その時のイヌの姿が忘れられなくて飼う気にはなかなか出来なかった」、「転勤の時、知人のもとにおいてきた」などの経験から、〈最後まで世話を続けられるか不安に思う〉‘終生ケアが出来るか’という不安もあった。また、「母は雨の夜も外に連れて行ってトイレをさせていた。イヌの世話は大変だって知っているから、自分が中心になって飼うことにはずっと反対していた」、「子どもや主人には学校や仕事があるから、実際にはどれだけ協力出来るのかはわからない」、「泊りがけの家族旅行が出来なくなる」など〈一人にケア負担が集中することや生活パターンが混乱することに不安を感じる〉‘ケア負担と生活パターンの変化’へのおそれが見られた。また、飼うことを躊躇していたのに「子どもにペットショップに連れて行かれ、『お母さんが賛成なら飼う、反対ならやめる』と言われた」、「玄関を開けると娘が子猫を抱いて立っていて、『排水溝でびしょ濡れになっていた。自分はおとなだから責任をもって飼う』なんて言うので、それで、飼うことになった」、外出先の夫から「『良い子がいるので、飼いたいんだけど』と電話が掛けて来た」など、〈他者の熱意や意思に押されて決める〉‘譲歩した選択’をする場合もあった。しかし、‘譲歩した選択’だと感じた場合でも、飼い主自身も‘イヌ・ネコ大好き・なじみ経験あり’であり、「抱いたらすっかり可愛くなってしまった」など、全く不本意な選択をした様子はみられなかった。

(3) 【シミュレーションと調整】：飼い主は飼育に向けて具体的に行動を始め、イヌ・ネコを選んだり実際の生活やケアを想定したりする【シミュレーションと調整】をしていた。これは【不安と迷い】への対処にもなっていた。たとえば‘終生ケアが出来るか’という不安については「私の年齢なら最後までみられるし、この子が介護が必要になる頃には退職しているから出来る」、「子どもが家を出たあとでも私がみられる」と考えていた。老親の生きがいや楽しみとしてイヌを贈り、「私達が世話しに来るし、飼えなくなったら引き継ぐ」というケースもあり、〈状況が変化しても、最

後までケア出来る見通しをつける〉‘ケアを続けられるという見通し’をつけられるようにしていた。また、‘ケア負担と生活パターンの変化’については「散歩は子どもがする」、「休日は息子と主人が世話する」などと〈一人に負担が掛らないように家族でケアを分担する〉‘家族でケアの分担’をすることで対処しようとしていた。実際には誰かが中心になる必要もあり、母親が飼育のキーパーソンになることが多かったが、子どもが「飼いたい」と強く希望した場合は、その子に「責任もって世話しなさい」と念を押すなどして、‘家族でケアの分担’することを強調していた

飼い主は、「犬種を決めるのに、2年ぐら家族で『何がうちに一番合うか』って、本をひっくり返したりして決めたのがこの犬種だった」というようにくさまざまな条件を考え、自分のうちに適したイヌ・ネコを選ぶ‘我が家に適した子を選ぶ’こともしていた。飼い主によって条件は異なり、「子どものために飼うのだからおとなしいイヌ」、「意思が強く明るい子」などと性格の特性、「毛が短いほうが、手入れが楽だ」などケアの容易さ、「マンションなので小型で無駄吠えをしないイヌ」と住環境、「丸い顔が好き」、「長い姿が可愛い」など姿形、「ペアにするから女の子」と性別などであった。このような‘我が家に適した子を選ぶ’傾向はイヌの場合に強くみられた。この背景には、イヌは犬種や性別によって大きさや性格、必要なケアが異なり、飼い主の生活に与える影響が大きいためではないかと考えられる。

このように、飼い主には‘我が家に適した子を選ぶ’、‘家族でケアの分担’などの作業をすることで‘ケアを続けられるという見通し’をつける様子が見られた。

また、飼い主の【シミュレーションと調整】の特徴として〈イヌ・ネコを飼うことや飼育ケアについて検討を重ねるのではなく、ほどほどのところで妥協したり、その場に応じて対応したりする〉‘折り合いをつける’という姿勢がさまざまな場面でみられた。‘我が家に適した子を選ぶ’ために熱心に情報を集めていた飼い主でも最終的に決める時には、「注文してから3カ月後にやっと連絡があった。喜んで行ってみたら、思っていたのとはちょっと違っていただけで、待ちきれない気持ちになくなってこの子に決めた」、「一日車で回っても、ロングの男の子は他にいなかったから、そ

の店に引き返してその子に決めた」などある日のある範囲内で決めてしまう様子がみられた。また、イヌ・ネコを迎える日の準備をみると、「この子を買ったペットショップで15分位飼い方のビデオを見て、そこで餌やトイレ、ケージなど必要なものを一通り買った」、「子猫をくれた人から餌を分けてもらって、とりあえずホームセンターでトイレと砂を買った」など必ずしも準備万端を整えて迎えるのではなく、その場その場で対応する姿勢もみられた。

このように、ある程度のところで【シミュレーションと調整】を切り上げたり、その場その場で対応したりすることは、柔軟で現実的なケアを展開し‘互いに楽しく、無理なく暮らせるケア’を継続するためには欠かせない姿勢と考えられる。また、飼育の知識や経験があり、【シミュレーションと調整】も十分行い、納得したうえで‘折り合いをつける’場合もあったと考えられる。実際的にも、どこかで‘折り合いをつける’ことをしないと、飼い始めることも出来なくなる。

一方、‘折り合いをつける’ことは無責任なケア、誤ったケアにつながる可能性もある。特に準備段階での【シミュレーションと調整】では、飼育プロセスで何が起きるのか、さまざまな場面を想像したり、5年後、10年後までを予想したりすることは難しい。‘ケアを続けられるという見通し’をつけたとしても、老いや死、医療や介護まで含めて検討するのは困難である。むしろ、目の前の元気で小さくて人懐っこいイヌ・ネコをみると、気持ちは通じ合うし、飼育は容易であると感じるかもしれない。また、‘めぐり会ったこの子’と特別な意味付けをすることで、衝動的で感情的な結び付きを形成することもある。

このようなことから、専門家は準備段階の【シミュレーションと調整】を飼い主に任せ、どこで‘折り合いをつける’のかの判断も飼い主にゆだねるのではなく、飼育前では何をどのようにチェックする必要があるのか、‘我が家に適した子を選ぶ’ことや‘ケアを続けられるという見通し’など【シミュレーションと調整】のポイントを伝えて適切な判断が出来るように関わる必要があると考えられる。

(5)【サポート資源の活用】：飼い主は‘我が家にあった子を選ぶ’時には「息子がネットで性格や飼い方を調べた」、「グッズの知識が全然なかったから、本を買った」など本やネットで情報を集めていた。「可愛

いヨークシャーテリアに一目ぼれしたんですけど、イヌを飼うと自由に動けなくなると思って迷っていた」という飼い主は、「友達に『イヌに合わせた生活をしないで、イヌを自分の生活に合わせればいいのよ』と言われて、なるほどと思った。友達ご夫婦は二人とも働いていて、そうやって暮らしていた」と身近な例をみて納得していた。また、身近なサポートとして、親しくしている獣医師に助言を求めた飼い主もいた。しかし、獣医師に「初めて飼うにはラブは大変。他の種の方が良い」とアドバイスされても、その、飼い主は「絶対にラブにする」と受け入れなかった。このように準備段階にある飼い主は、ネットや本、友人など〈容易に手に入れられるサポート資源を使う〉‘身近なサポートの利用’によってイヌ・ネコの特性や飼い方についての情報を得ていた。

準備段階で飼い主が得たサポートのなかには、情報そのものの正しさ、適切さが問題になる場合もあると思われる。また、その情報をどのように理解するのかという問題もある。「イヌを人間の生活に合わせれば良い」という友人のアドバイスを言葉通りに受け取って飼育を始めれば、問題が生じるかもしれない。獣医師という専門家の助言でも、自分の希望や意見に合わないと感じられないこともある。このように考えると、経験の浅い飼い主には情報の適否を判断することは難しく、飼い主にとっても専門的援助者にとっても適切なサポート資源にいかにかアクセスし活用するか、提供するかは重要な課題と考えられる。

援助者としては、準備段階の飼い主が‘身近なサポートの利用’をしようとすることを評価したうえで、適切な情報や代替案を示すなど双方向的な関係のなかで援助をする必要がある。そして、イヌ・ネコの特性や飼育ケアについて知ることは、興味深く楽しいことだと感じてもらえるように関わるのが重要であると考えられる。

3. 飼い主援助への提言

本研究の結果から、飼育準備段階の飼い主への援助について考えてみたい。

飼い主には‘互いに楽しく、無理なく暮らせるケア’をしていこうという意識や責任感がみられた。また、準備段階では飼い主なりのイヌ・ネコとの経験や愛情、期待など【イヌ・ネコとの関係認識】、飼育へ

の【不安や迷い】を持ちつつ、身近な【サポート資源の活用】をして【シミュレーションと調整】もしていた。しかし、知識や経験の不足から、飼い主の気持ちや認識、行動は矛盾した点や問題点もみられた。専門家は、援助者として飼い主の不足な点を補って適切な飼育準備が出来るように関わり、飼育開始後も安定的で継続的なケアが出来るように援助することが重要である。

具体的には、飼い主なりの考えや気持ち、行動の意味を飼い主の立場で理解しようとし、それを尊重したうえで適切な方法を提案することが必要である。特に【不安と迷い】と【シミュレーションと調整】への適切な関わりは重要である。イヌ・ネコへの期待は現実的か、飼い主の期待や現状にあった種は何か、飼育ケアのプロセスで課題になることや注意が必要な点は何か、どのような対処が考えられるかなど具体的に現在と将来を見通して、アドバイスすることが有用ではないかと考えられる。

また、準備段階での飼育ケアの提案や指導では、飼い主の考えとは異なることを説得することもあるが、飼い主はその専門家のアドバイスを受け入れない場合もありうる。難しい場面ではあるが、援助者は豊富で正確な知識を持つと同時に、相手の希望や価値観を理解し、徐々に専門的知識を導入していくことが必要であろう。このような飼い主の立場への関心と尊重する姿勢、イヌ・ネコについての専門的知識やスキル、愛護の気持ちを伝えることによって飼い主との信頼関係を形成し、飼育準備を適切に援助することが出来るのではないと思われる。

【サポート資源の活用】をみると、飼い主は本やネットなど間接的な方法や身近にいる人々からサポートを得ていた。しかし、元来、動物医療・看護は飼い主と専門家とが直接的に援助のやりとりをする活動である。準備段階においても、専門家は飼い主と直接関わって、飼い主の期待や飼育の条件などを共に検討出来る機会を提供する必要があると思われる。動物看護師が飼育の準備段階で飼い主との信頼関係を形成することが出来れば、飼育開始後も、飼い主とイヌ・ネコにとって‘互いに楽しく、無理なく暮らせるケア’になるように共に考え、サポートしていけるのではないかと考えられる。

4. 今後の課題

本研究の協力者である飼い主は、イヌ・ネコへの関心が高く、愛情と責任を持ってケアを続けていると考えられる人々であった。そのため、準備段階における葛藤や問題は比較的少なかったのではないと思われる。しかし、【イヌ・ネコとの関係認識】や【不安と迷い】、【シミュレーションと調整】をみると、今後の飼育過程ではさまざまな課題が生じる可能性がある。今後の研究課題としては、このような準備段階を経た飼い主が、飼育開始後、‘互いに楽しく、無理なく暮らせるケア’をどのように展開し、問題を対処するのか、動物医療・看護の専門的援助者は日常的ケアや老いや病い、看取りについてどのような役割を担っているのかをみていく必要がある。

付記

研究協力者の飼い主の皆様に感謝申し上げます。本研究はヤマザキ学園大学共同研究費、文部科学省科学研究費補助金基盤研究B「ライフスタイルとしてのケアラ（介護・養育）体験とサポートモデルの構築」（研究代表者木下康仁）の補助を受けた。

引用文献

- 1) 五十嵐幸男：巻頭言、アニマル・ナーシング、7-2、3（2002）
- 2) 長田久雄：動物看護師の教育課程が関わる課題とは？私はどう考える①パネリストからの提言、アニマル・ナーシング、8(1)、63（2003）
- 3) 細井戸大成：家庭動物医療が求める動物看護技術、獣医保健看護学シンポジウム 獣医保健看護学のありかた－教育・資格・職域－抄録集：10-11（2008）
- 4) 赤池久恵：糖尿病の犬と飼い主との関わりを通して、看護指導の意義を考える、アニマル・ナーシング、5-6、4-11（2001）
- 5) 西谷孝子：「動物看護専門職」としての自立に向けて、アニマル・ナーシング、12(1)、1-4（2007）
- 6) 木下康仁：ライブ M-GTA 実践的質的研究法 修正版 グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて、弘文堂、東京（2007）
- 7) 小倉啓子：ペット飼い主の動物看護師に対する専門的ケア支援者認識に関する質的研究(1)－比較的問題の少ないペット飼い主の体験から－、アニマル・ナーシング、14(1)、11-22（2010）

短報

がんサロンを開催した1例

三輪教子

A canine cancer advocacy salon

Noriko Miwa

カニエ動物クリニック

〒497-0050 愛知県海部郡蟹江町学戸四丁目164番地

要約

がん治療の成功には、『治療を左右する4つの力』という理念を基に、獣医師、動物看護師、飼い主が良好な関係を築くことが必要だと考える。今回我々は、飼い主を『第2の患者』と捉えサポートするために、がんサロンを開催した。がんサロンの開催によって、飼い主から様々な情報を収集することができ、動物だけではなく飼い主にも配慮したがん看護が行えた。その結果、長期にわたるがん治療には、がんサロンの開催は有効であると考えられた。

キーワード：飼い主、がんサロン、がん治療チーム

SUMMARY

The success of clinical treatment for cancer depends on the extent of metastasis, the immune response of the animal, and the cost and efficiency of veterinary treatment. Therefore, the veterinarians, veterinary nurses, and animal owners should share a healthy relationship. We established a “cancer advocacy salon” in order to provide support to the animal owner who is regarded as “the second patient.” Through this cancer advocacy salon, we were able to collect a variety of information from the animal owners, and expand the scope of cancer treatment services to include not only the animals but also the animal owners. The establishment of this cancer advocacy salon was found effective for the long-term cancer treatment of animals.

Keywords : animal owner, cancer advocacy salon, cancer treatment team

1. はじめに

当院では『治療を左右する4つの力』(川村 2010)¹⁾という理念を持ち腫瘍診療にあたっている(図1)。そして、がん治療の成功には、獣医師、動物看護師、飼い主が、がん治療チームとして良好な関係を築くことが必要だと考える(図2)。筆者は、日付、治療内容、治療の反応/状態、検査結果等を記載したがん治療経過記録を作成し(図3)、動物だけでなく飼い主にも着目した看護を試みてきた。しかし、がん治療が長期に及ぶと治療を断念していく飼い主も少なくはなかった。

医療界のがん治療チームは医師、看護師、薬剤師などの様々な分野が協力し患者をサポートするだけでなく、患者を抱える家族を「第二の患者」と位置づけ

① がんの力	増殖力、浸潤・転移力
② 動物の力	体力、免疫力、陽気な性格
③ 飼い主の力	愛情の深さ、経済力、治療の理解力、生死感、陽気な性格
④ 医療の力	キャリア(内科/外科)、放射線治療、インフォームド・コンセント力、人脈、情熱・胆力・総合判断力、スタッフの結束力

図1：治療を左右する4つの力(文献¹⁾より改変)

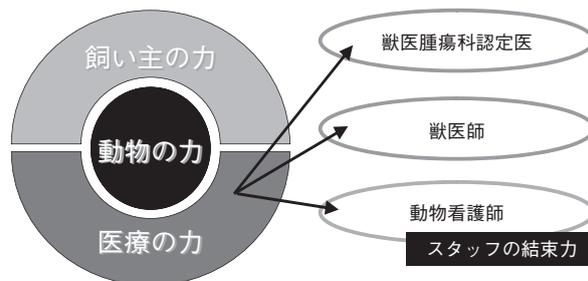


図2：理想とするがん治療チームの構成

日付	治療内容	治療の反応/状態	検査結果(T etc)	その他関連点	オーナー備考(状況/問題点)
10.10	VCR 0.5mg/w / 3days Pte 10mg/w / 3days	AD	WBC 18500 APF 210 PLT 165000 Tctc 398 Gcr 4540		リンパ腫の進行が速い 2週間以内に再燃した可能性あり
10.13		AD	WBC 7700 APF 270 PLT 150000 Gcr 3600		リンパ腫の進行が速い 2週間以内に再燃した可能性あり
11.3		AD	WBC 14900 APF 340 PLT 151000 Co 120 Gcr 5000		リンパ腫の進行が速い 2週間以内に再燃した可能性あり
11.14		AD	WBC 9400 APF 310 PLT 140000 Co 90 Gcr 3000		リンパ腫の進行が速い 2週間以内に再燃した可能性あり
12.15		AD	WBC 14500 APF 330 PLT 130000 Gcr 3000		リンパ腫の進行が速い 2週間以内に再燃した可能性あり
1.5		AD	WBC 13000 APF 320 PLT 120000 Gcr 3000		リンパ腫の進行が速い 2週間以内に再燃した可能性あり
1.20		AD	WBC 12000 APF 310 PLT 110000 Gcr 3000		リンパ腫の進行が速い 2週間以内に再燃した可能性あり

図3：がん治療経過記録の一例

表1 がんサロンの概要

目的	治療の悩みを話し、気分転換をする
対象	担癌動物の飼い主
	担癌動物を亡くした飼い主
開催頻度	2ヶ月に1回
所要時間	3時間程度
場所	カフェ(院外)

(町田 2005)、看護の対象として支援している²⁾。そこで、筆者は飼い主を第二の患者と捉えサポートすることが治療の継続に繋がるのではないかと考え、がんサロンを開催した(表1)。

今回、筆者はがんサロンの開催により飼い主と良好な関係を築くことができ、治療を行う上でも有効な成果をあげることができたので、その1例を報告する。

2. がんサロンの開催

がんサロンの開催目的は、飼い主同士の会話によって治療への不安を解消し、気分転換を図ることとした。参加対象を担癌動物の飼い主、または、担癌動物を亡くした飼い主とした。開催場所には、担癌動物を亡くした飼い主への配慮から、動物の同伴の出来ないカフェを選んだ。その一角で昼食をとりながら行っている。がんサロンの開催は、およそ2ヶ月に1回、3時間程度で、3～4名の飼い主が参加している。参加時のルールは特に定めていない。

3. 症例紹介

〈プロフィール〉 ウェルシュコーギー・ペンブローグ
年齢：6歳齢 性別：雌(未避妊) 体重：9.8kg
〈既往歴〉なし
〈現病歴〉2日前から頸部に浮腫が見られるとの主訴で来院した。診察時、下顎リンパ節と膝下リンパ節の

腫脹を確認した。膝下リンパ節のFNAを実施したところ明瞭な核仁を有する大型のリンパ球が多数認められたため、細胞学的検査とクロナリティー検査を依頼した。

〈診断〉ステージⅢ a B細胞性低分化型多中心型リンパ腫

ステージⅢ、サブステージ a、低分化型ではあるが表現型がB細胞型ということから、化学療法により長期の寛解期間と生存期間が望めるのではないかと考えられた。

〈治療〉COPプロトコルを基本に、再燃時のレスキュー療法にはL-アスパラキナーゼとロムスチンを使用した。COPプロトコル開始直後から治療に対する反応が得られ、頸部の浮腫は改善し、下顎リンパ節の縮小も認められた。

4. 経過(抗癌剤の奏効率と飼い主の言動の変化)

第49病日(完全寛解)

「この病気は治らないのか」「飼い方がいけなかったのだろうか」「待ち時間が長すぎて待ちくたびれた」と問診時に頻繁に話した。

第119病日(完全寛解)

「リンパ腫の治療仲間ができた」「病院で〇〇さんに会うことが楽しみになった」と、同じ治療をしている飼い主と待合室で知り合ったことを嬉しそうに話していた。

第187病日(完全寛解)

「次はいつ病院で会えるのだろうか」と、プロトコルの変更に伴い、以前のように会えなくなった飼い主との再会を心待ちにしていた。

第218病日(完全寛解)

がんサロン開催。(初参加)

飼い主は、がん治療への不安だけでなく、家族のことやこれまで飼っていた動物のことなど取り留めのない会話ができることを喜んでいった。

第283病日(完全寛解)

がんサロン開催。(2回目の参加)

第345病日(再燃) がんサロンにて

「また最初から抗癌剤治療のやり直しか」という再燃により再開されたプロトコルに対する落胆の言葉が聞かれた。また、「この子の検査結果が悪いと、私

も病院から帰ると家で寝込んでいる」と、症例の検査結果や病状の悪化とともに自身も体調を崩していることを話した。

症例には継続的な下痢症状があり、腹部超音波検査では腸間膜リンパ節の腫脹が確認できた。また、血液バフィーコート塗抹標本上にリンパ芽球の出現を認めた。

第407病日（再燃）

がんサロン開催。（4回目の参加）

第473病日（再燃） がんサロンにて

「不安でよく眠れず、食欲もない」「現病状について詳しく獣医師に質問したいが、治療に対して不満を持っていると思われたくないの、直接自分からは聞けない」と話した。

この頃には飼い主の体調の変化も激しく、会話の中にこれまでの明るさは無かった。

第552病日

症例は、朝から嘔吐、下痢が始まり、来院後すぐに死亡した。

飼い主は、「昨夜もっと遊んであげればよかった」と後悔し、「最期を看取る覚悟はしていたつもりだったが…」と言葉を詰まらせた。

症例死亡後 第14日

飼い主は、筆者との電話でのやりとりの中で、「病院に通っていた道を通るだけでも、闘病生活を思い出してしまう」「本当はスタッフのみんなにも会いたいのだけれど、まだ病院には辛くて行けない」と話した。

症例死亡後 第17日

がんサロン開催。

飼い主は、症例死亡後第14日に「〇〇さんにまだ会うまでの気持ちの整理がついていない」とも話しており、今回のがんサロンは欠席した。しかし、その後のがんサロンには積極的に参加している。

5. がんサロンの成果

がんサロンの開催により、これまで病院だけでしか会えなかった飼い主同士が、定期的に会えるようになり、今まで一人で抱えていた不安や悩みを分かち合えた。また、お互いに仲間意識が芽生え、治療の励みになった。

一方、筆者は、がんサロンに参加することで信頼関係が深められ、問診時だけでは感じとることのできな

かった飼い主の抱える治療への不安を理解できた。そして、飼い主が持病を抱え、症例の病態悪化とともに体調を崩している現状を知ることができた。また、獣医師に直接伝えられずにひとりで抱えていた飼い主の悩みも聞くことができた。

病院外での開催は、慌ただしい待合室とは違いゆっくりと会話することができ、飼い主同士の近況報告など病気以外の会話も弾んだ。そして、筆者も、勤務時間とは違いのんびりと飼い主と会話することができた。

6. 考察

医療界でのがんサロンは、がん患者や家族が悩みや療養体験を語り合い、気分転換や心の癒しの場になる交流会である。同様に、当院で実施しているがんサロンは、表1にあるようにお互いの治療の悩みを話しながら、飼い主に気分転換をしてもらうことを目的とした。

今回の症例では、まず、問診時の会話から飼い主はがん治療の継続に不安を抱え、悩みを分かち合える仲間を必要としていると推測された。しかし、がんサロンでの飼い主同士の交流によって「自分だけではない」と仲間の存在を認識でき、治療で生じたストレスを軽減できたと考える。

次に、病院外での開催は待合室とは違い、落ち着いた環境を提供できたと考えられた。症例死亡後第14日の飼い主との会話にもあるように、飼い主は「闘病生活を思い出すような状況が辛い」と話し、症例死亡直後のがんサロンに参加しなかった。しかし、その後がんサロンには参加していることから、院外開催の意義があったのではないかと考える。

また、飼い主との信頼関係が深まり、問診時の会話からだけでは把握できなかった治療への不安や体調の変化などの情報を得られた結果、飼い主に対する細やかなサポートが可能になったのではないかと考える。がん治療チームとして良好な関係を築くことができ、長期間に及ぶ抗癌剤治療を継続できたと考える。

以上のことから、当院が実施するがんサロンの目的を果たせたのではないかと考える。がんサロンの開催は、がん治療経過記録だけよりも飼い主に配慮したがん看護が行え、長期にわたるがん治療には有効であったと考えられる。

7. おわりに

がんサロンでは飼い主から様々な情報を収集することができ、がん看護に生かすことができた。しかし、情報収集ばかりに気をとられ、本来の目的を見失わないよう努める必要がある。

引用文献

- 1) 川村裕子：がんになった動物のご家族への接し方、日本臨床獣医学フォーラム年次大会2010プロシーディング、12-24-36-4-39 (2010)
- 2) 町田いづみ：がん患者家族心理とその反応、緩和医療学7(2)、146-151 (2005)

●日本動物看護学会 会則

1995年12月9日制定
1997年11月29日改正
1999年6月6日改正
2008年7月13日改正
2010年7月25日改正

第1章 総則

第1条 (名称)

本会の名称は、日本動物看護学会 (The Japanese Society of Animal Nursing) とする。

第2条 (事務局)

本会の事務局は、東京都千代田区神田淡路町2丁目23番地 アクセス御茶ノ水2階におく。

第2章 目的と活動

第3条 (目的)

本会は動物看護に関する研究を中心として、会員相互の情報交換の場を設け、この分野における研究の進展を図ることを目的とする。

第4条 (活動)

本会は前条の目的を達成するために、次の活動を行う。

1. 大会・例会・講座 (講演・研究発表・シンポジウム・セミナーなどを含む) の開催。
2. 学会誌・書籍などの企画・編集・発行。
3. その他、本会の目的を達成するために必要な諸活動。

第3章 会員

第5条 (入会資格)

本会の目的に賛同する者であれば、誰でも本会に入会することができる。

第6条 (種別)

会員の種別は次のとおりとする。

正会員：本会の目的に賛同する個人。

名誉会員：本会の活動において格段に功労のあった正会員、もしくはこれ以外から、理事会が推薦し総会において承認された個人または法人・団体。

賛助会員：本会の目的に賛同し、本会への財政的援助を申し出た個人または法人・団体。

第7条 (会費)

会員は年会費を納入しなければならない。年会費の金額は次のとおりとする。

正会員：5,000円

賛助会員 (個人)：10,000円

賛助会員 (法人・団体)：30,000円

役員：10,000円

名誉会員からは年会費を徴収しない。

第8条 (会員の資格喪失)

会員が次のどれかに該当した時は、会員資格を喪失する。

1. 退会した時。
2. 死亡もしくは失踪宣告を受けた時。
3. 会費を2年以上滞納した時。
4. 除名された時。本会の名誉を著しく損なう行為があった場合は、総会における承認を経て、該当者を除名することができる。
5. 本会が消滅した時。

第9条 (退会)

会員は本会事務局へ届け出た上で、任意に退会することができる。

第4章 役員

第10条 (種類・定数)

本会役員は次のとおりとする。

会長：1名 理事長：1名 副理事長：2名

常任理事：若干名 理事：若干名

監事：1～2名

第11条 (選出・職務)

1. 会長
 - ①総会において、本会員の中から互選で選ばれる。
 - ②本会を代表し、本会会務を統括する。
2. 理事長
 - ①理事会において、理事の中から互選で選ばれる。
 - ②本会会務を運営する。
 - ③会長に事故があった時、または会長が欠けた時は、その職務を代行する。
3. 副理事長
 - ①理事長の任命によって、理事の中から選ばれる。
 - ②会長・理事長を補佐して、本会会務を運営する。
4. 常任理事
 - ①理事会において、理事の中から互選で選ばれる。
 - ②会長・理事長を補佐して、本会会務を執行する。
5. 理事
 - ①総会において、本会員の中から互選で選ばれる。
 - ②会長・理事長を補佐して、本会会務を運営する。
6. 監事
 - ①総会において、本会員の中から互選で選ばれる。
 - ②本会の会計と会務の執行状況を監査する。
7. 名誉会長
 - ①本会には名誉会長を置くことができる。
 - ②本会の会長若しくは理事長経験者又は特に顕著な功績のあった者のうちから理事会の議を経て理事長が推薦し、総会で決定する。
 - ③名誉会長は役員ではないものとする。

第12条 (任期)

役員任期は2年間とし、再任を妨げない。

1. 役員任期の2年間とは、選出された定時総会終了月の翌月1日から、2年後の定時総会終了月の末日までとする。
2. 役員は、辞任または任期満了後においても、後任者が就任するまではその職務を行う必要がある。

第13条 (解任)

役員が次のどちらかに該当する時は、総会において、出席数3分の2以上の議決によって解任することができる。この場合、その役員は議決前に弁明の機会を得

る。

1. 心身の故障のため、職務の執行に堪えないと認められる時。
2. 役員としての義務違反、その他、役員としてふさわしくない行為があると認められる時。

第5章 委員

第14条 (種類・定数)

本会委員は次のとおりとする。

- 評議員：若干名
- 編集委員：若干名
- 動物看護師認定試験委員：若干名

第15条 (選出・職務)

1. 評議員
 - ①理事会において本会員の中から選ばれる。
 - ②本会活動に関する意見交換や議論を行うことにより、本会活動に寄与する。
2. 編集委員
 - ①理事会において本会員の中から選ばれる。
編集委員長は編集委員の中から互選で選ばれる。
 - ②学会誌・書籍などの企画・編集を行うことにより、本会活動に寄与する。
3. 動物看護師認定試験委員
 - ①理事会において本会員の中から選ばれる。
動物看護師認定試験委員長は、理事長が任命し常任理事会の承認を経て選ばれる。
 - ②本会主催「動物看護師資格認定試験」の実施により、本会活動に寄与する。

第16条 (任期)

委員の任期は2年間とし、再任もあり得る。

1. 委員任期の2年間とは、選出された定時総会終了月の翌月1日から、2年後の定時総会終了月の末日までとする。
2. 委員は、辞任または任期満了後においても、後任者が就任するまではその職務を行う必要がある。

第17条 (解任)

委員が次のどちらかに該当する時は、総会において、出席数3分の2以上の議決によって解任することができる。この場合、その委員は議決前に弁明の機会を得る。

1. 心身の故障のため、職務の執行に堪えないと認められる時。
2. 委員としての義務違反、その他、委員としてふさわしくない行為があると認められる時。

第6章 会議・委員会

第18条（常任理事会）

1. 理事長が必要と判断する時に、随時招集する。
2. 理事長・副理事長・常任理事によって組織される、本学会務の執行機関である。
3. 開催定足数は出席該当者数の1/2以上とする。ただし、開催前に委任状を提出した者、および、審議事項について開催前に書状にて意見を表明した者は出席とみなす。
4. 本学会務の執行に関する諸事項を審議・議決する。議決は出席者の過半数をもって行い、同数の場合は理事長がこれを決する。
5. 理事会での審議・議決が必要とする事項については、これを理事会へ提議する。
6. 開催後、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。
 - ①開催日時・開催場所
 - ②出席者数・出席者名
 - ③審議事項・議決事項

第19条（理事会）

1. 理事長が必要と判断する時に、随時招集する。
2. 理事長・副理事長・常任理事・理事によって組織される、本学会務の運営機関である。
3. 会長は必要と判断する時に、随時招集および出席することができる。
4. 開催定足数は出席該当者数の1/2以上とする。ただし、開催前に委任状を提出した者、および、審議事項について開催前に書状にて意見を表明した者は出席とみなす。

5. 本学会務の運営に関する諸事項を審議・議決する。議決は出席者の過半数をもって行い、同数の場合は理事長がこれを決する。
6. 総会での審議・議決が必要とする事項については、これを総会へ提議する。
7. 開催後、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。
 - ①開催日時・開催場所
 - ②出席者数・出席者名
 - ③審議事項・議決事項

第20条（総会）

1. 会長が、毎会計年度終了後4か月以内に招集する。
2. 会長が必要と認める時は、臨時総会を招集することができる。
3. 正会員によって組織される、本学会の最高議決機関である。
4. 次の事項を審議・議決する。議決は出席者の過半数をもって行う。
 - ①活動報告・収支決算報告
 - ②活動計画案・収支予算案
 - ③他に理事会が、総会での審議・議決が必要であると認めた事項
 - ④その他
5. 議長1名（本学会員）を、出席者の中から互選で選ぶ。
6. 開催後、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。
 - ①開催日時・開催場所
 - ②出席者数
 - ③審議事項・議決事項
 - ④議長によって選任された議事録署名人2名（本学会員）の署名と押印

第21条（評議員会）

1. 会長または理事長が必要と判断する時に、随時招集する。
2. 評議員によって組織され、本会活動に関する意見交換を行う。

第22条（編集委員会）

1. 編集委員長が必要と判断する時に、随時招集する。
2. 編集委員によって組織され、学会誌・書籍などの企画・編集を行う。

た動議に基づき、総会での議決を経て変更できる。

2. 本会則は1995年12月9日に制定されたものを、2010年7月25日の総会において改訂したものである。
3. 本学会誌の投稿規定は別途定める。

第23条（動物看護師認定試験委員会）

以上

1. 動物看護師認定試験委員長が必要と判断する際に、随時招集する。
2. 動物看護師認定試験委員によって組織され、本会主催「動物看護師資格認定試験」を実施する。
3. 開催定足数は出席該当者数の1/2以上とする。
ただし、開催前に委任状を提出した者、および、審議事項について開催前に書状にて意見を表明した者は出席とみなす。
4. 理事会での審議・議決が必要な事項を発案した時は、これを提議することができる。
5. 開催後、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。
 - ①開催日時・開催場所
 - ②出席者数・出席者名
 - ③審議事項・議決事項

第24条（会議・委員会の設置）

会長または理事長が必要と認める時は、理事会の承認を経て、新たな会議・委員会を設置することができる。

第7章 会計

第25条（概要）

会計は次のとおりとする。

1. 本会の経費は、会費・その他の収入をもってこれに充てる。
2. 本会の会計年度は、4月1日～翌年3月31日とする。
3. 収支決算報告・収支予算案は、総会の議決を要する。

付則

1. 本会則は、正会員3名以上の賛成を経て提出され
-

●日本動物看護学会 役員

敬称略・五十音順・2012年2月1日現在

会 長

高橋 英司（東京大学 名誉教授）

理事長

桜井富士朗（帝京科学大学 アニマルサイエンス学科
教授）

副理事長

杉山 尚子（ヤマザキ動物専門学校）

松原 孝子（日本獣医生命科学大学、認定動物看護師）

常任理事

長田 久雄（桜美林大学大学院 教授）

小松 千江（新ゆりがおか動物病院、認定動物看護師）

種市康太郎（桜美林大学 准教授）

中俣由紀子（かしま動物病院、認定動物看護師）

村中 志朗（広尾動物病院、東京都獣医師会 会長）

遊座 晶子（つくば国際ペット専門学校 教諭、認定
動物看護師）

渡辺 茂（慶応義塾大学 文学部 教授）

渡辺 隆之（帝京科学大学 アニマルサイエンス学科、
東京都獣医師会 理事）

理 事

阿部 令子（アニマルサポートオフィス・ミーチョ、
認定動物看護師）

五十嵐江梨子（一般社団法人日本動物看護職協会 職
員、認定動物看護師）

井田 竜馬（井田竜馬行政書士事務所）

大和田一雄（山形大学 准教授、独立行政法人産業技
術総合研究所）

金山 喜一（日本大学 獣医生理学教室）

柴野 悟（動物病院モルム）

齋藤みちる（七里ガ浜ペットクリニック、認定動物看
護師）

崎山 法子（王寺動物病院、認定動物看護師）

佐藤 克（佐藤獣医科）

高橋 和明（日本獣医生命科学大学 名誉教授）

多川 政弘（日本獣医生命科学大学 獣医学科 教授）

廣田 順子（アリスどうぶつクリニック）

福所 秋雄（日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学
科 教授）

牧田 登之（福岡動物病院看護士学院）

若尾 義人（ヤマザキ学園大学 動物看護学科 教授）

監事

竹内 吉夫（編集者）

高見澤重昭（高見澤法律事務所）

●投稿規程

1997年11月1日施行

2002年9月10日改正

2010年10月1日改正

(目的)

規定は「Animal Nursing」の投稿論文の投稿方法を定めたものである。

(投稿内容)

本誌への投稿論文は、原則として動物看護領域に関する未公開のものとし、動物看護学に貢献しうるための内容とする。

(投稿資格)

投稿者は本会会員に限るものとする。ただし会員以外の投稿も編集委員会の審査によって受理することができる。

(原稿の採否)

投稿論文の採否は、編集委員または編集委員会が委嘱した論文審査員が審査し、編集委員会が採否を決定する。審査には査読制を採用し、論文内容、論文形式、論文の長さ、図表数などを含めて審査する。編集委員会は原稿の訂正を求めたり、返却したりする場合がある。掲載は原則として原稿採択順とする。尚、査読中の論文で著者が6カ月以内に委員会に再び送って来ない場合は、受理しないことがある。対象の福祉面・倫理面に問題のある論文は採択しない。

(投稿区分)

原稿の区分は次の通りとする。

1. 総説、特別寄稿

動物看護領域において認められた業績や最近の内外の研究とその動向等を解説したもの。

2. 原著

論文にオリジナリティーがあり、動物看護およびそれに関連のある理論的または技術的な内容のもの。

3. 短報

動物看護に関するオリジナルな研究、工夫、仮説、貴重な症例報告等の速報的なもの。

4. 症例報告

主として動物看護に関しての症例報告とする。

5. 技術講座

動物看護に関する技術的および検査等について解説したもの。

6. 資料、報告、意見、トピック

動物看護および、それに関連のある薬物、機器の紹介、国内外の研究施設の紹介、国内外の動物看護学における文献のサマリーの紹介。

7. その他編集委員会において掲載が認められたもの。

(投稿要領)

投稿要領は次のとおりとする。

1. 投稿原稿は、正1部、副2部の計3部を提出するものとする(写真、表はいずれも添付する)。正原稿には、全項目を記入した所定の「原稿添付用の表紙」を添付する。送付する封筒の表面には、赤字で「Animal Nursing 投稿原稿」と明示する。

2. 原著は、和文または英文とし、他の論文は外国人による解説などを除き、原則和文とする。和文原稿は新仮名遣いとし、なるべく当用漢字を用い、外来語と生物名はカタカナ表記とする。英文は十分に推敲し、かつ英文論文の作成に習熟した者による校閲を受けたものであること。英文校閲を学会に依頼する場合、および編集委員会が英文校閲を必要と判断した場合、その費用は著者負担とする。

3. 原稿はA4判用紙に、パソコンまたはワープロを用いて横書きで作成する。和文原稿は約1cmの行間をとり、英文原稿はダブルスペースとする。上下左右に2.5cm以上の余白を設けること。

4. 原稿の枚数(表題、図、表、写真等すべてを含む)

総説、特別寄稿—刷り上がり頁数5頁以内(A4判ワープロ等(25字×24行)20枚以内)

原著—刷り上がり頁数5頁以内(A4判ワープロ等(25字×24行)20枚以内)

短報—刷り上がり頁数3頁以内(A4判ワープロ等(25字×24行)12枚以内)

症例報告一刷り上がり頁数4頁以内 (A4判ワープロ等 (25字×24行) 16枚以内)

技術講座一刷り上がり頁数4頁以内 (A4判ワープロ等 (25字×24行) 16枚以内)

資料、報告、意見、トピック一刷り上がり頁数3頁以内 (A4判ワープロ等 (25字×24行) 12枚以内)

原著、短報、症例報告、技術講座、資料、報告、意見、トピックにあつては、図、表は合計10枚以内とする。それ以上の場合は編集委員の判断に委ねる。

5. 原稿の第1ページは、上から順に論文題目、著者名、所属機関およびその所在地 (郵便番号を含む) を和文および英文の順に記載する。著者名はカタカナでフリガナを付し、著者の所属は研究実施時の所属機関とする。ただし、第1著者にあつては、所属の移動があつた場合、著者が希望すれば現所属機関名を付記することができる。また連絡責任者の所属、住所および電話番号 (ファックス番号、E-mailアドレス) を記入する。

6. 原著、短報、症例報告にあつては、第2ページに英文SUMMARY (いずれも250語以内) およびKey words (ABC順で原著は5語以内、症例報告その他は3語以内) をダブルスペースで上下左右十分な余白をとり記載する。また英文校閲のためにその和訳も添付する。第3ページに和訳要約 (400字以内) および日本語のキーワード (英文Key wordsと同一の順) を記載する。

7. 原著にあつては、第4ページ以降からは、原則として序文 (Introduction)、方法 (Method)、結果 (Result)、考察 (Discussion)、引用文献 (Reference)、図表の順に記載する。その他の区分では引用文献以外はその限りではない。

8. 外国人名、国名、地名等は原語のまま第1字を大文字で記載する。ただし国名、地名等は原則としてカタカナ表示する。

動植物名は、原則として種名 (カタカナ) を使用する。ただし、一般的に使用されているものに限り、漢字を使用しても良い。それ以外のものはカタカナ表示する。

動植物、微生物の学名などイタリックにする。

薬品名は原則として一般名または局法名を使用し、

カタカナ表示する。

機器名等は原則として一般に使われている名称を和文で表示する。

本文中に一般名等で記載した薬品、機器等の商品 (製品) 名および社名等は、一般名称の直後に括弧内で記載することができる。

9. 図、表および写真は、まとめて原稿の最後に付し、その挿入位置は原稿の右欄外に明確に記入指定する。

10. 図、データはA4判の白色紙に記載し、写真は原図印刷が可能ないように、横7.7cmまたは16.0cmのいずれか、縦は9.0cm以下の大きさとし、白黒を原則とする。図、写真、表の番号 (Fig.1、Table 1 など) はそれぞれの裏および台紙に記し、番号順にA4判台紙に軽く貼付する。各図の表題および説明は和文で別紙にまとめて記載する。

11. 略語の常用的なものほかは、本文初出のときは完全綴りを併記する。

12. 数字は算用数字を用い、単位および略語は原則として下記の例に従う。

M, mM, mM, N, %, m, cml, mm, mm, nm, pm, cm², m, m, kg, g, mg, mg, ng, pg, hr, min, sec, msec, rpm, Hz, Ci, mCi, mCi, cpm, dpm, ppm, °C, cal, kcal, lux, CPE, LD

13. 引用文献の書き方

(1) 引用文献は本文中最初に引用された順に算用数字を打つ。

(2) 著者名は、6名以下の場合全員、7名以上の場合最初の6名までを書き、それに続いて et al. 和文では「ほか」を加える。著者名は姓 last of family name を先に出し、名 First name と middle name はこの順序に頭文字だけを書く。Ted R. Oege m a. Jr., WE. Floyd III のような junior や III (Third) が付く場合、Oegema TR. JR., Floyd. III. と記す。

(3) 英文雑誌の記載順序は

[著者名: 表題、雑誌名、巻、始めの頁-終わりの頁 (発行年)]

雑誌略称のピリオドは省略する。雑誌名はイタリック表記とする。ただし巻の通し頁がない場合は巻の次に (号) を記載する。付録の場合は、巻の次

に (Supple) と記載する。

以上

(4) 英文単行本の記載順序は

[著者名: 章名など、書名、版数、始めの頁-終わりの頁、発行所、発行地 (発行年)]

初版の場合は版数の記載は不要。

編者のある単行本の一章の場合の記載順序は

[著者名: 章名など、In: 編者名、書名、版数、始めの頁-終わりの頁、発行所、発行地 (発行年)]

複数の編者の単行本の中の一章の場合

[著者名: 章名など、In: 編者名、書名、版数、始めの頁-終わりの頁、発行所、発行地 (発行年)]

(5) 和文雑誌の記載順序は

[著者名: 表題、雑誌名、巻、始めの頁-終わりの頁 (発行年)]

巻の通し頁がない場合は巻の次に (号) を記載する。付録の場合は、巻の次に (Supple) と記載する。

(6) 和文単行本の記載順序は

[著者名: 章名など、書名 (編者名)、版数、始めの頁-終わりの頁、発行所、発行地 (発行年)]

(7) 翻訳本の記載順序は

[著者名 (監訳者あるいは訳者): 章名など、書名、版数、始めの頁-終わりの頁、発行所、発行地 (発行年)]

14. 印刷 (モノクロ) は50部について15,000円とする (希望者は投稿時に申し込むものとする)。

15. 投稿された論文 (原稿およびデータ) は理由の如何を問わず返却しない。

16. 本誌の発行は年1~2回とし、発行月は12月とする。

17. 原稿の送付および投稿に関する照会は下記宛とする。

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町2-23 アクセス御茶ノ水2F

日本動物看護学会 編集委員会

FAX 03 (5298) 2851 / E-mail info@jsan.gr.jp

18. 本誌に掲載された論文の著作権は日本動物看護学会に所属する。

(付則)

この改正は、2010年10月1日から施行する。

編集委員会

委員長 杉山 尚子（ヤマザキ動物専門学校）
委員 皆上 大吾（日本獣医生命科学大学 獣医保健学科 助教）
石岡 克己（日本獣医生命科学大学 獣医保健学科 准教授）
川添 敏弘（ヤマザキ学園大学 動物看護学科）
鯉江 洋（日本大学 生物資源科学部 准教授）
関口麻衣子（帝京科学大学 アニマルサイエンス学科）
種市康太郎（桜美林大学 准教授）
松原 孝子（日本獣医生命科学大学 獣医保健学科、認定動物看護師）
村尾 信義（倉敷芸術科学大学 生命動物科学科、認定動物看護師）

ゲストレビューワー

金児 恵（北海道武蔵女子短期大学 教養学科 准教授）
島津 明人（東京大学大学院 医学系研究科 准教授）

（五十音順・敬称略）

日本動物看護学会誌
Animal Nursing（アニマル・ナーシング） Vol.15-16

2012年3月31日

定価 2,500円（税込）本誌の購読料は会費に含めて徴収しています。

編集／日本動物看護学会編集委員会

発行人／高橋英司

発行／日本動物看護学会（会長 高橋英司）

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町2丁目23番 アクセス御茶ノ水2階

TEL 03-5298-2850 FAX 03-5298-2851 E-mail info@jsan.gr.jp

ホームページ <http://www.jsan.gr.jp>

印刷／株式会社オルツ

本誌の内容を無断で複写・複製・転載することを禁じます。

OLYMPUS[®]

Your Vision, Our Future

優しい力、
新登場。

動物用内視鏡システム



Helen 病状が、見える。

症状を言葉で伝えられない動物の診断に高画質画像が活躍します。

Helen 安心が、見える。

飼い主さんにスムーズなインフォームドコンセントを実現します。

Helen 元気が、見える。

開腹せずに各種の処置を可能にし、健康回復とQOL向上に貢献します。

製造販売元/ オリンパス メディカル システムズ株式会社

〒192-8507 東京都八王子市石川町2951

販売元/ 株式会社 AVS

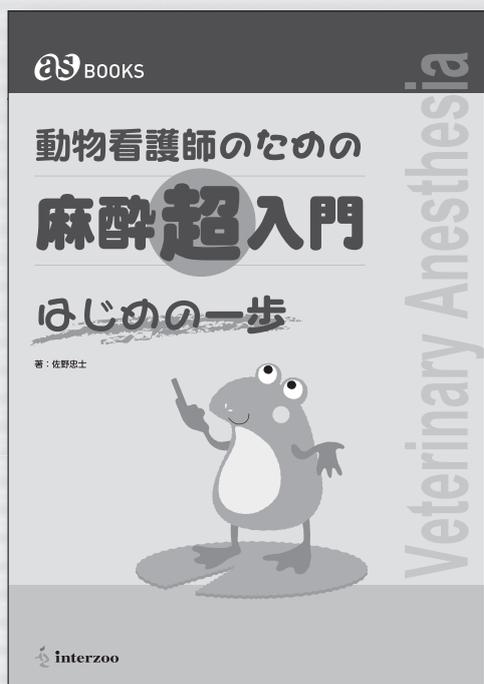
〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-22-2 新宿サンエービル5F TEL 03-3340-2071 FAX 03-3340-2049



ヘレン・ケラーの優しさのように
自らの障害を克服し、障害者の救済に一生を捧げた
ヘレン・ケラー。その限りない優しさに近づきたいという
思いからHelenという名前が生まれました。



おかげさまでベストセラー！ 動物



※表紙は制作途中のものです。

『AS』で好評の連載「麻酔超入門」が待望の書籍化！
「怖い」「難しい」「大変そう」…そんな麻酔に対する先入観を打ち消し、現場で本当に役に立つ知識を1冊にまとめました！

動物看護師のための

麻酔超入門

はじめの一步

著 佐野忠志

(日本大学生物資源科学部獣医学科総合臨床獣医学研究室)

A4版 並製 152頁

定価7,350円

(本体価格7,000円+税)

*一回のご注文につき別途送料が525円かかります。

好評
発売中

- 歴史や雑学などを折り込み、これまで「難しい」「近寄りがたい」と敬遠されがちだった麻酔の知識を親しみやすく解説！
- 豊富な写真・図版を駆使し、実際の現場で役立てられるコツなどを伝授！
- 書き下ろし特別付録として、麻酔時の患者の変化を記録し、振り返りに役立てられる「麻酔カルテ」を収録！

CONTENTS

第1章 麻酔について知ろう！

麻酔の歴史
麻酔って何？
麻酔の種類
麻酔薬の作用は？ 代謝・排泄・覚醒の仕組みは？

第2章 麻酔の流れを学ぼう！

麻酔の構造と管理
麻酔前の動物の評価
麻酔前投与薬
麻酔導入

第3章 安全な麻酔維持のために

モニタリングの目的
客観的評価の可能な麻酔モニター①
客観的評価の可能な麻酔モニター②
麻酔モニターのまとめ

第4章 麻酔からの覚醒

準備と手順
そのほかの処置と術後管理
疼痛管理 ～「痛くない手術」を行うために～

第5章 事例で学ぶ麻酔の実際(特に注意すべきケース)

短頭種の犬の麻酔
肥満動物の麻酔
心臓に問題がある動物の麻酔
肝臓に問題がある動物の麻酔
腎臓に問題がある動物の麻酔
神経に問題がある動物の麻酔
若齢動物の麻酔
高齢動物の麻酔

第6章 特別付録「麻酔カルテ」

「麻酔カルテ」とは何か？
麻酔カルテ記入のポイント

 **interzoo**
〒150-0002
東京都渋谷区渋谷 1-3-9
東海堂渋谷ビル 7F

受注専用TEL.
☎0120-80-1906
お電話受付：平日10：00～18：00

受注専用FAX.
☎0120-80-1872
FAX受付：年中無休・24時間受付

●インターネットで
<http://www.interzoo.co.jp/>



A5判 256頁
定価3,360円(本体3,200円+税)
ISBN978-4-89531-027-7

疾患別 動物看護学ハンドブック

2012年4月中旬発行

編著：日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学科臨床部門

患者にあわせた適切な動物看護・ケアを提供するために必要な「看護アセスメント」と「看護介入」のポイントを徹底解説！

より質の高い動物看護を行ううえで必要な疾患の病態理解と看護アセスメントのポイントを解説する実践テキスト。解剖機能的な分類に沿って、各器官の概論および疾患、看護過程のポイントを体系的に解説。また臨床現場で遭遇する機会の多い疾患をとりあげ、特徴、検査・診断、治療から、具体的な看護アセスメントまで実践に役立つ情報を表形式で紹介。個別の患者に対する適切な看護ケア、具体的な対応までをプランニングする力を身につけることができる、動物看護師必携の一冊。

あわせて読みたい！

豊富なビジュアルで犬・猫の疾患を解説！

ビジュアルで学ぶ動物看護学

編集：CAP編集部
A4判 216頁 オールカラー
動物看護師として必ず知っておくべき検査の基本や犬猫の代表的な約80の疾患など動物看護学の基礎知識を、豊富なビジュアルとともに体系的に学ぶことができる一冊。

【本書の構成】

- 器官のしくみ
- 観察ポイント
- 検査
- 看護時と日常生活での配慮
- 看護アセスメント
- 代表的な疾患(表形式)
 1. 特徴
 2. 検査・診断
 3. 治療
 4. 一般的な看護問題
 5. 一般的な看護目標
 6. 看護介入
- 看護解説

動物看護過程の展開に役立つ実践情報が満載！

動物病院ナースのための臨床テクニク

監修：石田卓夫 A4判変型 160頁 オールカラー
定価5,040円(本体4,800円+税) ISBN978-4-88500-653-1

臨床現場において動物看護師が必ず身につけておくべき基本手技22を収録したテクニク集。各手技について、アドバイスや手順、手技のコツ・ポイント、失敗したときの対処法などを豊富な図表とともに説明。「獣医師に伝えるポイント」や「動物の家族に伝えるポイント」も掲載。

写真でわかる動物看護師実践マニュアル

監修：山村穂積 A4判変型 148頁
定価3,990円(本体3,800円+税) ISBN978-4-938396-78-7

動物看護師の基本的な業務について、1日の流れに沿って解説。仕事の心構えをはじめ、動物や飼い主との接し方、機器の名称や扱い方のポイント、看護の知識や技術、事務系業務のコツなどを写真とともにわかりやすく紹介。

動物病院検査技術ガイド

監修：石田卓夫 B5判 204頁 オールカラー
定価5,040円(本体4,800円+税) ISBN978-4-88500-673-9

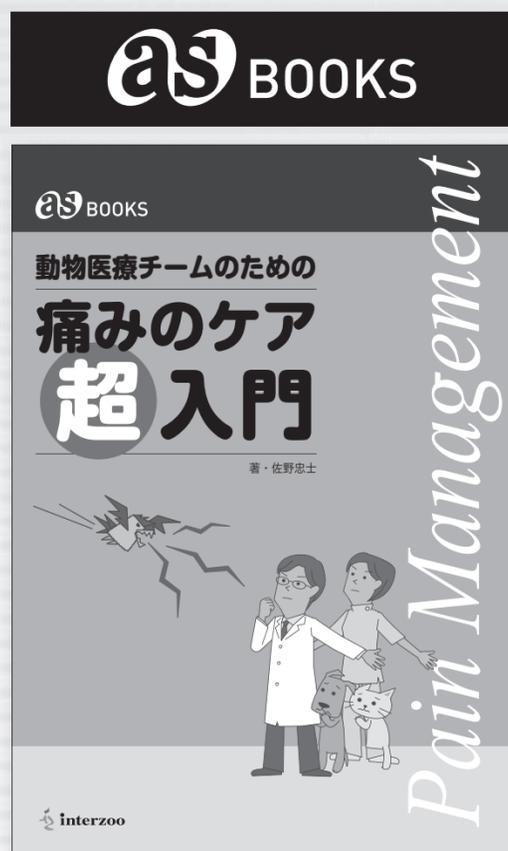
「チーム医療」を実践するために、病院スタッフに求められる検査の技術と知識を網羅した動物病院必携の検査ガイド決定版。一般的に行う検査から、習熟が必要なものまで幅広く取り上げ、豊富な写真や図表とともにわかりやすく解説。

動物病院スタッフのための輸液療法

監訳：鈴木一由 B5判 120頁
定価2,940円(本体2,800円+税) ISBN978-4-88500-681-4

臨床現場で日常的に行われる輸液療法についてシンプルかつわかりやすく解説した、動物病院スタッフのための実践的な入門書。臨床現場に即した実践的な輸液療法と動物のモニタリングを「基礎」から学べる一冊。

看護師さん必携の“超入門シリーズ”!



※表紙は変更になる場合があります。

動物医療チームのための

痛みのケア 超入門

著 佐野忠士

好評
発売中

A4版 並製本
96頁(本文オールカラー)
定価6,300円

(本体価格6,000円+税)
*一回のご注文につき別途送料が525円かかります。

月刊 **AS** 誌上で2009年4月から1年あまりにわたって掲載された好評連載「動物看護師の視点で行う痛みのケア」が、**AS** BOOKS として1冊になりました!

客観的・具体的に評価することの難しい感覚「痛み」について、まずは理解を深め、さらに何ができるか・何をすべきかを丁寧に解説。「物言えぬ動物の痛みの代弁者」である動物看護師に語りかけるだけでなく、「動物医療チーム」として、獣医師・動物看護師・オーナーが一体になって行う痛みのケアを提案。一歩先行くケアのために、ぜひ身につけておきたい知識が満載です。

主な内容

- 1章 痛みについて考える
 - ① 痛みについて考える
 - ② 痛いと「感じる」ということは？
 - 2章 痛みの種類と管理のポイント
 - ① 痛みの分類と評価法
 - ② 急性痛の特徴と管理のポイント
 - ③ 慢性痛の特徴と管理のポイント
 - ④ がん性疼痛の特徴と管理のポイント
 - 3章 鎮痛薬の種類と特徴
 - ① 鎮痛薬の種類 1 オピオイド
 - ② 鎮痛薬の種類 2 NSAIDs
 - ③ 鎮痛薬の種類 3 鎮痛補助薬
 - 4章 総合的な痛みのケア
 - ① 「総合的な痛みのケア」について考える
- 特別編 症例で考える動物医療チームの痛みのケア

interzoo
〒150-0002
東京都渋谷区渋谷 1-3-9
東海堂渋谷ビル 7F

受注専用TEL.
0120-80-1906
お電話受付：平日10:00~18:00

受注専用FAX.
0120-80-1872
FAX受付：年中無休・24時間受付

●インターネットで
<http://www.interzoo.co.jp/>



株式会社 緑書房

〒103-0004 東京都中央区東日本橋2-8-3 東日本橋グリーンビル
販売部 TEL.03-6833-0560 FAX.03-6833-0566
web ショップ <http://www.pet-honpo.com>